ヲノ坪窯跡発掘調査報告

津市一身田上津部田所在

１９９７・３

三重県埋蔵文化財センター

序

津市一身田上津部田地区は、県庁舎から数百mの距離にありながら、平成にはいるまでは水田が広がり丘陵には森が繁る、いわゆる「里山」が残された、緑豊かな地域でした。平成２年の県道津関線整備を皮切りに、住宅地開発がはじめられ、平成６年には津駅から県立美術館を経て当地に至る道路も整備されました。文化会館、生涯学習センター、図書館、女性センターが一体となった三重県総合文化センターが開館し、同年その施設を中心会場とした第９回国民文化祭が開催されるなど、文化ゾーンとして、三重県の芸術文化の中心となるべく整備が進められ、急速にその姿を変えております。このたび、文化ゾーンの機能をさらに強化するべく、整備の進められていた新県立博物館及び県公文書館建設用地として、三重県総合文化センター東側を整備することとなりました。

周辺には古墳や中世城館なども多数存在し、歴史的風土も豊かなこの地が、文化ゾーンとして整備が進められることは、大変有意義なことであるといえますが、そのために今回の調査地は消滅します。新県立博物館、県公文書館を訪れる人々が、我々の祖先が残した足跡に思いを馳せ、その上に立って新しい未来を築いていっていただきたいと考えます。また、今回の調査では津の戦災の証拠である焼夷弾が発見されました。戦後50年余を経て顔を出した遺品を大切に保存し、平和行政のために有効に活用していきたいと考えます。最後になりましたが、調査にあたって御協力をいただきました津市教育委員会をはじめ、県土地開発公社の各位に心からの感謝を申し上げ冒頭の挨拶といたします。

１９９７年３月

三重県埋蔵文化財センター

所長　奥　村　敏　夫

例　　言

1．本書は三重県が財団法人三重県土地開発公社から委託を受けて実施した、平成８年度三重県センター博物館（仮称）事業用地造成工事に伴うヲノ坪窯跡の発掘調査結果をまとめたものである。

2．調査期間は平成８年５月７日から７月30日である。

3．調査は、下記の体制で行った。

調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター
　　調査第１課　主　事　田中　久生
　　研修員　前川　明男
調査協力　　津市教育委員会

現場作業　　三重県土地開発公社
　　株式会社ジェイエイ津安芸（三重県土地開発公社委託）

4．本書の執筆・編集は、田中が行い、前川が補佐した。遺物実測・トレースについては、埋蔵文化財センター管理指導課及び田中、前川が行った。遺構写真は田中・前川が、遺物写真は田中が撮影した。なお、遺物写真の縮尺は考慮していない。

5．本書に用いた地図および遺構実測図の方位は、全て磁北を用いた。磁北はＮ６°30′（平成２年）真北から振れている。

6．引用・参考文献は、調査のまとめの後に一括して掲載した。

7．本書で報告した記録および出土遺物は、現在のところ、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。

8.　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

Ⅰ　前言 …… (1)
　1　調査の契機 …… (1)
　2　調査の経過 …… (1)
　3　遺跡の名称 …… (2)
　4　調査の方法 …… (2)
Ⅱ　位置と環境 …… (3)
　1　遺跡の位置 …… (3)
　2　歴史的環境 …… (3)
Ⅲ　調査の成果－層位と遺構－ …… (11)
　1　現況と基本的層序 …… (11)
　2　主な遺構 …… (11)
Ⅳ　調査の成果－遺物－ …… (15)
　1　古墳時代の遺物 …… (15)
　2　その他の遺物 …… (15)
　3　戦争関係遺物 …… (21)
Ⅴ　調査のまとめ …… (24)

挿図目次

図1．遺跡位置図 …… (4)
図2．調査地周辺地形図（平成8年） …… (5)
図3．調査地周辺地形図（平成2年） …… (5)
図4．ヲノ坪窯跡調査前地形図 …… (6)
図5．北山端地区調査前地形図 …… (6)
図6．ヲノ坪窯跡調査区地形図 …… (7)
図7．ヲノ坪窯跡調査区平面図 …… (8)
図8．北山端地区調査区地形図 …… (9)
図9．北山端地区調査区平面図 …… (10)
図10．A－B土層断面図 …… (12)
図11．C－D（土塁状遺構）土層断面図 …… (12)

図12. Ｅ－Ｆ（トレンチ№１）土層断面図 …… (12)
図13. Ｇ－Ｈ（トレンチ№２）土層断面図 …… (12)
図14. Ｉ－Ｊ（土坑群）土層断面図 …… (12)
図15. Ｋ－Ｌ土層断面図 …… (13)
図16. 土塁状遺構土器群出土状況実測図 …… (13)
図17. 北山端地区調査区北辺土層図 …… (14)
図18. 北山端地区Ｍ－Ｎ（土壇状遺構）土層図 …… (14)
図19. 出土須恵器実測図（１） …… (16)
図20. 出土須恵器実測図（２） …… (17)
図21. 出土朝顔形埴輪実測図 …… (17)
図22. 出土器財埴輪及び形象埴輪実測図 …… (17)
図23. 出土円筒埴輪実測図（１） …… (18)
図24. 出土円筒埴輪実測図（２） …… (19)
図25. 出土石器類実測図 …… (20)
図26. 出土焼夷弾実測図 …… (21)
図27. 10ポンド焼夷弾M74構成図 …… (22)

表　目　次

表１. 出土遺物観察表（須恵器） …… (22)
表２. 出土遺物観察表（円筒埴輪） …… (23)
表３. 出土遺物観察表（器財、形象埴輪） …… (23)
表４. 出土遺物観察表（石器類） …… (23)

写真図版目次

ＰＬ. １　調査前風景
ＰＬ. ２　ヲノ坪窯跡調査区全景
ＰＬ. ３　北山端地区全景ほか
ＰＬ. ４　ヲノ坪窯跡土坑群全景ほか
ＰＬ. ５　出土遺物(1)
ＰＬ. ６　出土遺物(2)

Ⅰ．前　　言

1　調査の契機

三重県教育委員会は、昭和62年３月の博物館構想検討委員会による博物館整備にかかる答申を受け、博物館整備に着手し、平成元年度、斎宮歴史博物館を開館した。続いて、開館後40年以上が経過し、狭隘化、老朽化が著しい県立博物館の整備に着手することとし、平成３年度には基本調査、４年度には基本構想策定と準備が進められた。

基本構想策定作業の中で用地条件が整理され、用地選定作業が進められた。平成６年度にはその条件を満たし、かつ文化ゾーンの整備を目的とし、三重県センター博物館（仮称）建設用地が県総合文化センター隣接地に決定されるに至った。

そのため、津市上浜町及び同一身田上津部田地内の文化財調査が必要となったのである。

2　調査の経過

a　調査の経過

県教育委員会は、事業用地の買収及び造成を財団法人三重県土地開発公社（以下「公社」という）に委託した。当センターは公社から埋蔵文化財の有無について照会を受け、平成６年度に当センター係長泉雄二を担当者として分布調査を行った。その結果に加え、用地付近には北東に峯治城跡、北西に上津部田城跡が所在すること。また、峯治城跡は平成元年度、２年度の県道豊里久居線整備にかかる調査や、平成３年度に津市教育委員会によって宅地開発にかかる調査などが行われた際に、今回の事業用地近くから弥生～奈良時代にかけての遺構が発見されたことなどから、埋蔵文化財の存在が想定された。

このため、平成７年度に当センター主事竹田憲治を担当者として試掘調査を行い、ヲノ坪窯跡Ａ地区1,350㎡、同Ｂ地区975㎡、北山端地区2,200㎡について埋蔵文化財の存在が想定された。

この結果をもとに、県教育委員会文化芸術課及び事業主である公社と協議を行ったところ、文化芸術課より、ヲノ坪窯跡Ｂ地区については、新博物館の計画の中で遺跡範囲を含んで所在する２次林を自然観察林等として保存活用することが示された。そこで、当該地区には造成工事は行わないことを確認し、これ以外の保護の不可能な部分、ヲノ坪窯跡Ａ地区1,350㎡（以後Ａ地区を表記しない）、及び北山端地区2,000㎡については、本調査を行うことと決定した。

また、現場作業については、公社から労働力の提供を受けること、報告書作成業務については、公社から委託を受けることとなった。

この結果をもとに、平成８年５月７日から田中久生・前川明男を担当として調査にあたった。

調査前地形測量は、公社に依頼した。

調査に際しては、総合文化センター近隣であること、調査区西を里道が通っていること、調査区横が大きな法面であることから、調査区の周囲にバリケードを設置し、安全の確保につとめた。

調査は、ヲノ坪窯跡から開始した。先行して行われた自然環境調査の結果、保存措置が必要な樹木を移植し、残りの立木を除去し、調査区の形に合わせて４ｍメッシュを設定した。

北山端地区は、土壇状遺構周辺地区に４ｍメッシュを、調査区長軸方向に幅４ｍのトレンチ２本を設定して行った。抜根作業、樹木の搬出は、おもに人力で行ったが、適宜重機も併用した

ヲノ坪窯跡の調査を進める内に、遺跡範囲が南東方向に延びることが判明した。このため、公社と協議し、調査区を南東方向に200㎡拡張した。

北山端地区は、遺構、遺物ともにまばらであるため、土壇状遺構部分と２本のトレンチに縮小した。

以上の経緯によって調査は、平成８年７月30日に終了した。最終的な調査面積は2,000㎡となった。

現地は、直径10～20cmの孟宗竹と常緑広葉樹の入り乱れた森となっており、かつ、遺構検出面までが浅く、根の除去をほとんど人力で行わなければならず、大変な作業となった。梅雨時の雨もあり、真夏のような暑さもあったが、大きな事故もなく、順調に調査を終了できたのも、現地で作業に従事していただいた方々の協力の賜である。

御芳名を掲げることは控えさせていただくが、感謝いたします。

b　調査日誌（抄）

４月28日　立木伐採開始

5月2日　調査機材等搬入。

5月7日　ヲノ坪窯跡から調査開始。

5月14日　土塁状部分の表土を除去。中世の遺構、遺物とも検出されず。D11地区で焼夷弾筒発見。

5月16日　土塁状遺構の北端G４・H４地区から、須恵器蓋杯・須恵質埴輪のまとまりを検出。

5月20日　E10地区の溝から焼夷弾筒検出。津警察署に通報し処理を依頼する。その結果、危険がないと判断されたため、筒の保管については埋蔵文化財センターが行うと申し出て了承を得た。

5月21日　G４・H４地区の土器群について、写真撮影および１／10実測を行う。

5月28日　H８地区から焼夷弾筒出土

5月29日　土塁状遺構南側部分（H８地区以南）で遺構検出面としていた赤褐色土の下層から暗褐色土の層を確認、須恵質埴輪１点を検出したため、赤褐色土は除去するものと判断し掘削を開始。

6月3日　J３～５地区精査。土坑を検出し、掘削を開始した。J５地区で焼夷弾筒発見。

6月4日　昨日掘削を開始した土坑から、須恵器・須恵質埴輪のほか、焼けた粘土塊を検出した。

6月5日　土坑埋土中から赤く焼けた粘土塊や、黒く焼締った粘土塊が多数出土したため、須恵器窯が存在する可能性が生じた。そのためJ３～K３地区にトレンチ№.１を、J５～K４地区にトレンチ№.２を設定、掘削を開始。

6月6日　土塁状遺構横断土層実測。土塁ではないことが判明した。トレンチ№.１・２掘削完了。窯の存在は確認できなかった。

6月7日　I２地区から焼夷弾筒発見。土坑群が南東方向に延びることが判明したため、調査区を約200㎡拡張することとし、範囲を設定した。

6月12日　土坑群掘削続行。窯壁破片が多い。土坑は極めて不整形である。拡張区の表土除去開始。

6月14日　D７～D11地区に旧地形確認のためのトレンチを設定し、精査。遺構等発見できず。

6月17日　H４地区にトレンチを設定、掘削開始。しかし窯体は確認できず。

6月26日　北山端地区の表土除去を開始。重機使用。

6月28日　北山端地区にベルトコンベアー搬入。

7月2日　ヲノ坪窯跡の全景写真撮影のため、清掃。

7月3日　ヲノ坪窯跡写真撮影。

7月4日　北山端地区表土除去開始。

7月10日　北山端地区より焼夷弾発見。

7月24日　北山端地区写真撮影。

7月25･26日　北山端地区測量。

7月30日　県土地開発公社に現場を引き渡し、撤収。

c　文化財保護法にかかる通知

文化財保護法（以下、「法」と呼称）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等に行っている。

・法第57条の３第１項（文化庁長官あて）

平成８年５月２日付け三土開公第347号（県土地開発公社理事長通知）

・法第98条の２第１項（文化庁長官あて）

平成８年４月17日付け教文701号（県教育委員会教育長通知）

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（津警察署長あて）

平成９年１月31日付け教文6-16号（県教育委員会教育長通知）

3　遺跡の名称

遺跡は、行政的には津市一身田上津部田オノ坪、津市上浜町六丁目に所在するが、遺跡名については旧字名を使用し、それぞれヲノ坪遺跡、北山端遺跡として、調査を開始した。しかし、調査の結果、ヲノ坪遺跡は窯跡であることが判明したため、ヲノ坪窯跡と呼称することとした。北山端遺跡は遺跡ではないと判断されるため北山端地区とした。

4　調査の方法

a　小地区設定について

ヲノ坪窯跡は、調査区内を４m四方の升目で区切ることによって小地区を設定した。西からアルファベット、北から数字を付け、北隅をC－３とした。

北山端地区については、土壇状遺構部分についてはヲノ坪窯跡と同様に小地区を設定した。２条のトレンチは南をAトレンチ、北をBトレンチとした。

なお、この地区設定は調査区の形状に合わせたもので、国土座標軸とは無関係である。

b　遺構図面について

調査区全体の平面図及び地形図は、1/100で平板測量により作成した。土器出土状況は1/10で、各土層断面図は1/20で作成した。

Ⅱ．位置と環境

1　遺跡の位置

遺跡の所在する津市は伊勢平野のほぼ中央にあり、平野を横断して東流する志登茂川と安濃川の中下流域に位置する。

志登茂川は安芸郡芸濃町の丘陵に、安濃川は布引山地の北部にそれぞれ源を発し、丘陵を開析して下流に平野を形成した。その河口は両者が接するように伊勢湾に注ぐ。志登茂川と安濃川に挟まれた形で開析されずに残った丘陵が芸濃町から安濃町を経て津市の海岸近く、県庁舎付近まで続いている。

地質学的には奄芸層群（新生代第三紀鮮新世①）に属する。

調査地は標高20数mの丘陵上にあり、小さな谷に南面している。立木がなければ、眺望の利く高所である。現況は山林である。

2　歴史的環境

志登茂川中下流域には、旧石器時代の遺物及び遺構は最近まで発見されなかったが大古曽遺跡②(10)、六大Ｂ遺跡(11)で後期旧石器時代に属するナイフ型石器が出土し、志登茂川流域の人類の歴史が約30,000年前までさかのぼることがあきらかになった。

このように志登茂川流域における人類の足跡は早くから残されているが、ここでは調査結果に基づき、古墳時代を中心に概観することとしたい。

安濃川流域、志登茂川流域あわせても大型の前期古墳は確認されていない。最古とされる古墳は安濃川流域の坂本山古墳群③(2)である。

両地域で大型の古墳が造営されるのは５世紀に入ってからで、明合古墳④、池ノ谷古墳⑤の二つである。安濃川流域には前方後円墳が10基以上確認されているが、20～50mの小規模なものが多い。

古墳時代後期の幕開けとも言うべき、須恵器の生産が伊勢平野で開始されたのは、久居古窯跡群⑥である。５世紀末頃のことであった。

これとほぼ前後して安濃川及び志登茂川流域において群集墳が形成されはじめ、６世紀後半に最盛期を迎える。ことに長谷山東麓を中心に展開する長谷山古墳群⑦は、小古墳約450基を数える、群集墳の密集する地域である。

志登茂川流域では100基ほどが確認されており、ほとんどが後期に属する円墳である。付近で調査された例としては、木棺直葬で鉄鏃１本が出土した墓の谷１号墳⑧(3)、小規模な横穴式石室が検出された川北２号墳⑨(4)、木棺直葬で埴輪列が検出された門脇北古墳⑩(5)、須恵質埴輪を含む埴輪列が検出された西岡古墳⑪(6)、やや離れるが須恵質埴輪が検出された日余１号墳⑫(7)がある。このほか、見当山丘陵には古墳が点在する。しかし、早くから開発、開墾された丘陵であるため、すでに封土を失い消滅していった古墳があった可能性は高い。

また、今回の調査により底部に段をもつ円筒埴輪（いわゆる淡輪系埴輪）が出土したが、同様の埴輪が発見されている古墳及び遺跡をみると、三重県内では23ヶ所に登る出土遺跡が挙げられている⑬。周辺では３ヶ所ある。生産遺跡としては、北西に3.6kmの安濃町内多に、すでに消滅しているものの須恵質埴輪が採集されている内多古窯跡⑭(8)がある。大きくみるとヲノ坪窯跡と同じ丘陵群といえる。他に、安濃町内には丸岡Ｃ２号墳、明合１号墳がある。

淡輪系埴輪はないが、津市南部の半田地区には、須恵質埴輪が検出された藤谷埴輪窯跡群⑮(9)がある。埴輪中心であるが須恵器も併焼しており、久居古窯跡群とほぼ同時期の操業である。今回の調査成果を加えて、今後、これら窯業遺跡の生産物がどこに運ばれているかを追跡し、古墳時代における当地域の様相が少しでも明らかになればと思う。

図１．遺跡位置図（1:50,000）（国土地理院　1:25,000　椋本・白子・津西部・津東部）

１．ヲノ坪窯跡　２．坂本山古墳群　３．墓ノ谷古墳群　４．川北２号墳　５．門脇北古墳
６．西岡古墳　７．日余１号墳　８．内多古窯跡　９．藤谷埴輪窯跡群
10．大古曽遺跡　11．六大Ｂ遺跡　12．橋垣内遺跡　13．窪田大垣内遺跡
14．峯治城跡　15．上津部田城跡　16．渋見砦跡

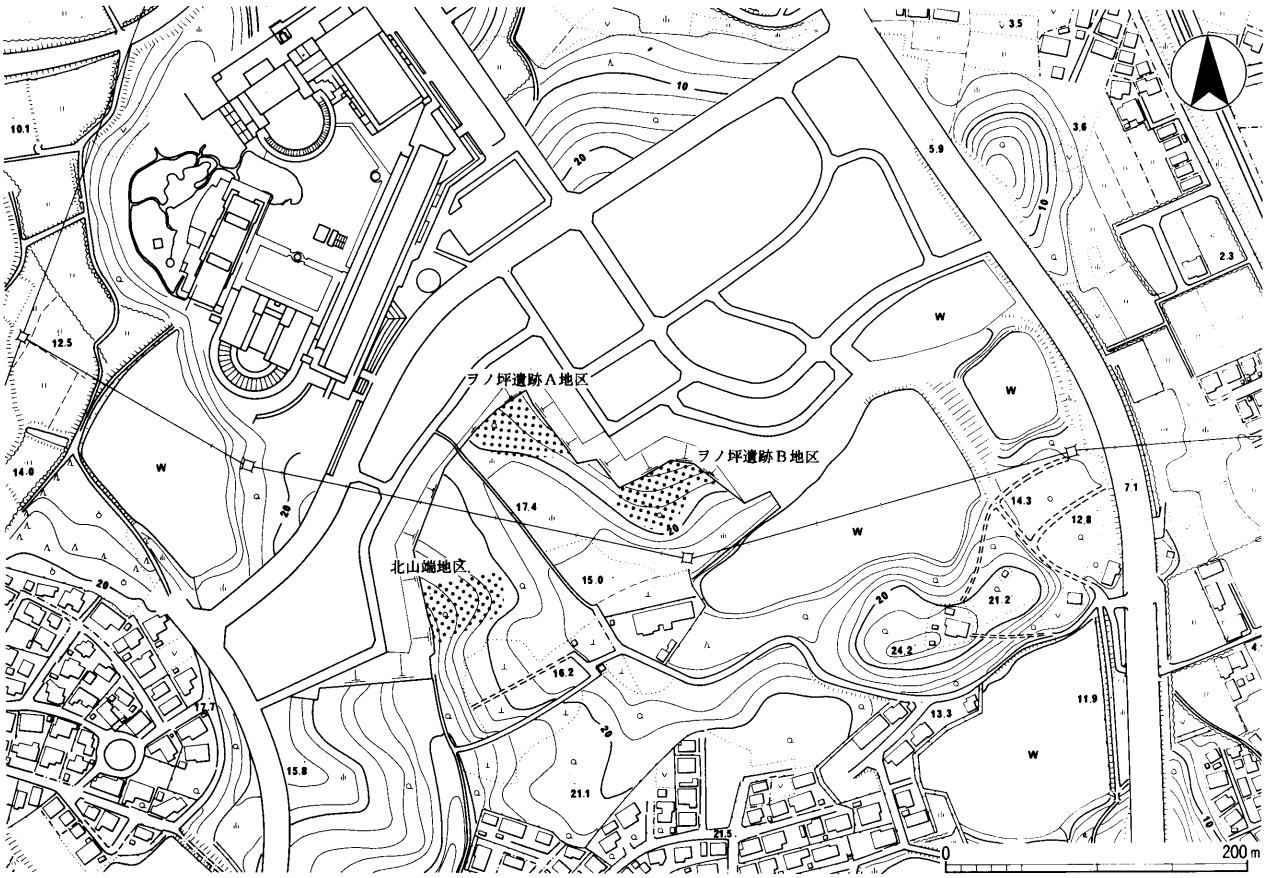


図２　調査地周辺地形図（平成８年）（1:5,000）

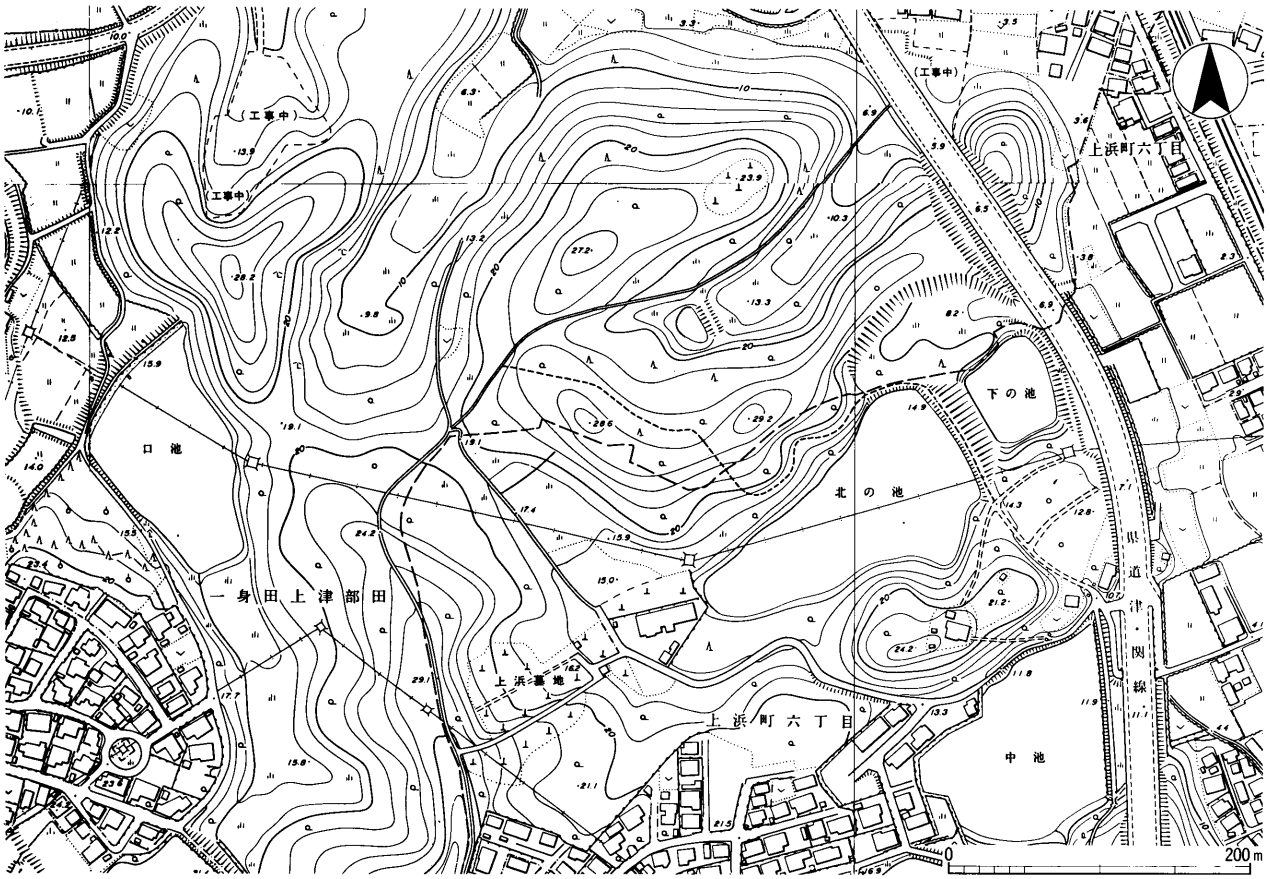


図３　調査地周辺地形図（平成２年）（1:5,000）

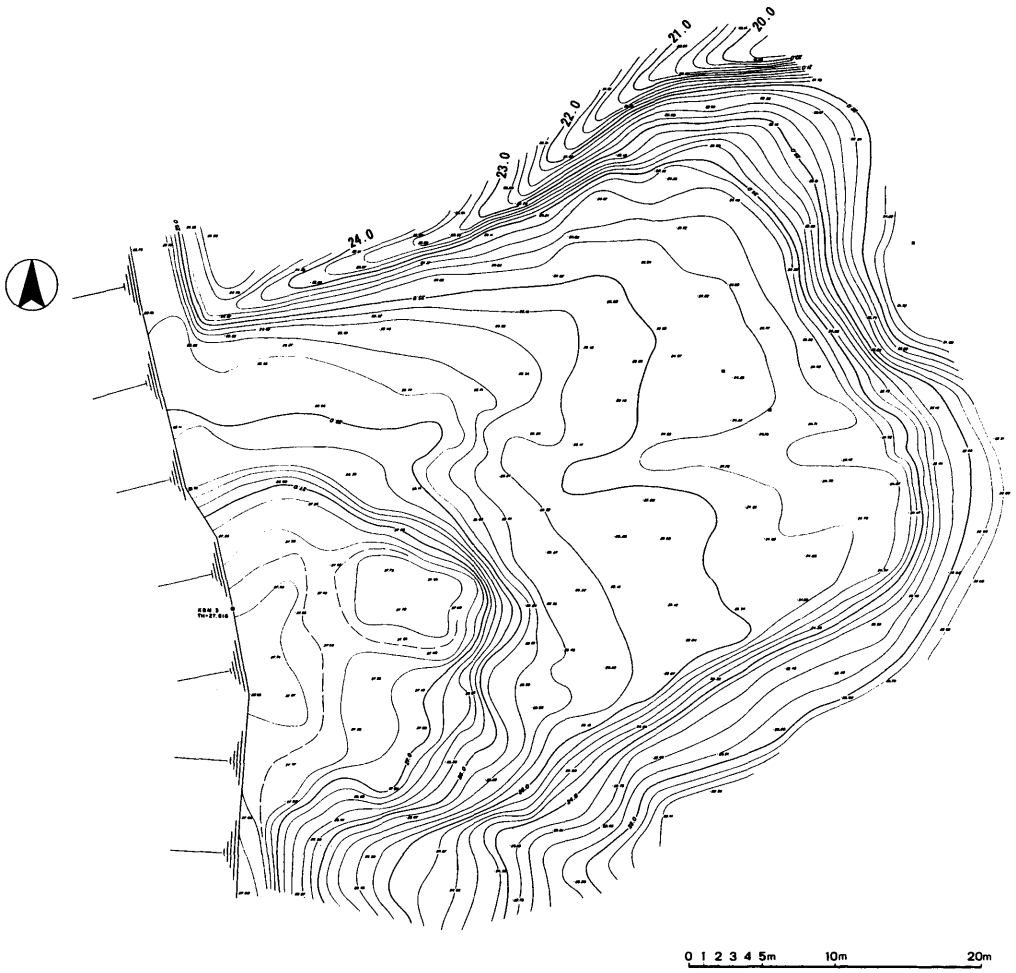


図４　ヲノ坪窯跡調査前地形図（1:400）

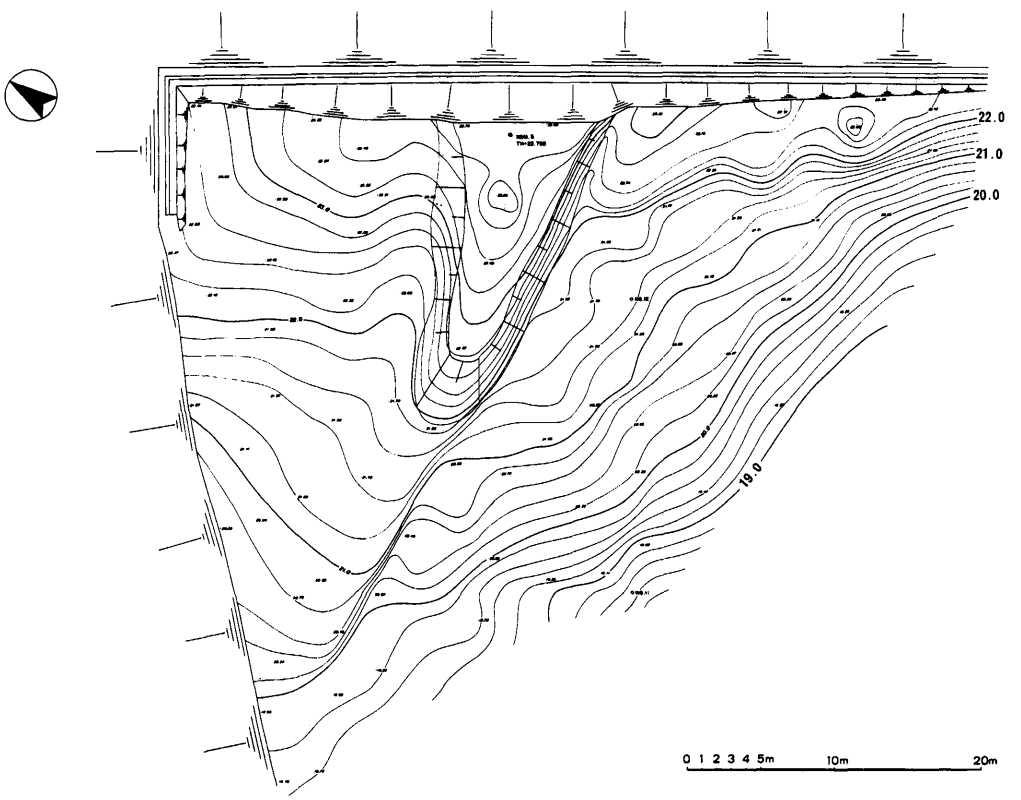


図５　北山端地区調査前地形図（1:400）

図６　ヲノ坪窯跡調査区地形図（1:200）

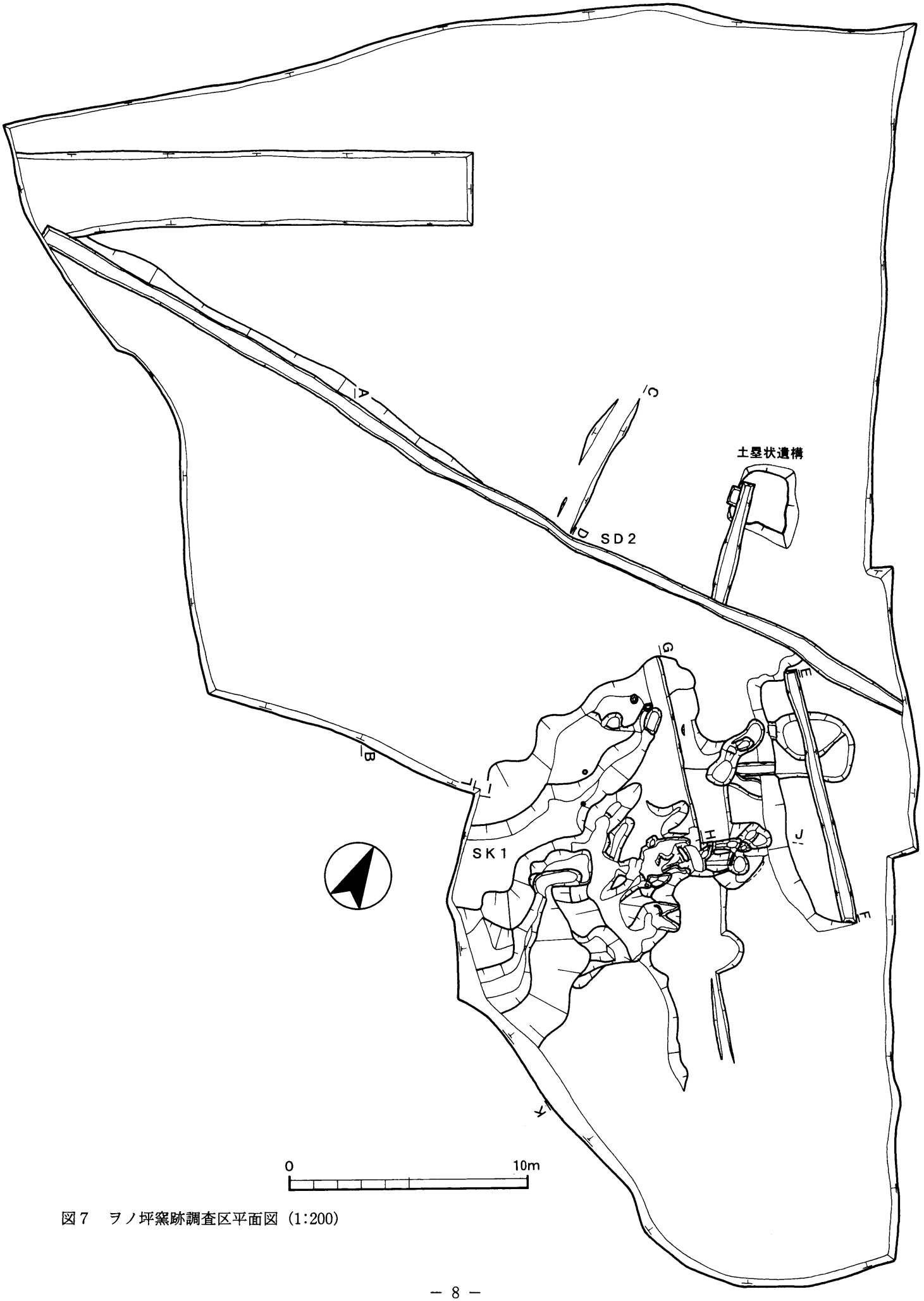


図7　ヲノ坪窯跡調査区平面図（1:200）

図８　北山端地区調査区地形図（1:200）

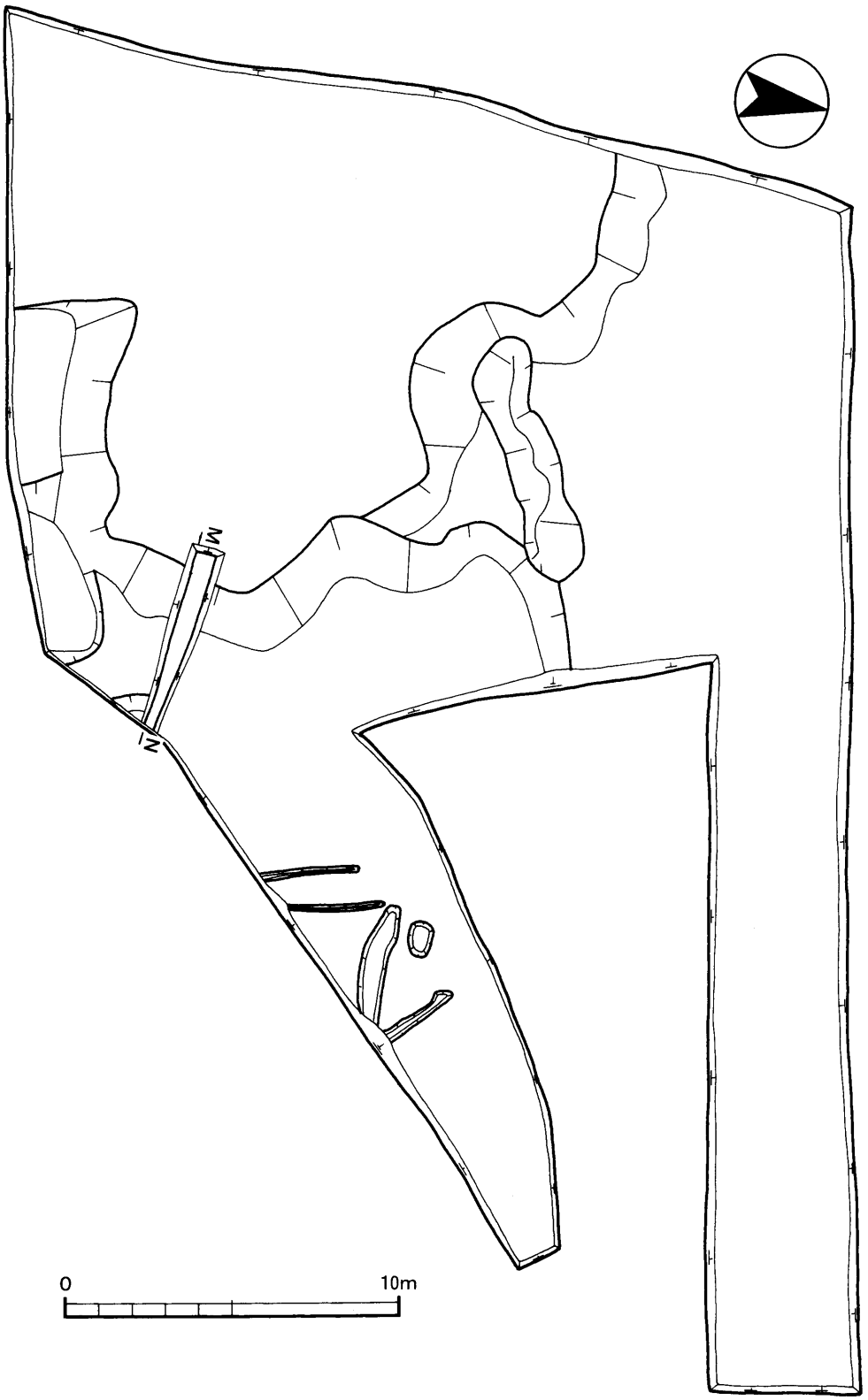


図９　北山端地区調査区平面図（1:200）

Ⅲ．調査の成果

1　現況と基本的層序

a　ヲノ坪窯跡　調査地は、現在、常緑広葉樹及び竹林となっており、表面には落葉の下に淡褐色土が約10～20cm堆積している。旧地主や周辺の住民の話によると、かつては畑地として利用されていた箇所も相当あるようである。

太平洋戦争中には食糧増産のため開墾が行われたが、その際にどのような整地が行われたかは不明である。その後、農林水産省の野菜試験場用地となり、茶が植えられた。昭和40年代に野菜試験場が移転し、現在に至っている。

整地を受けていると思われる調査地南部のフラットな部分の堆積は、以下のとおりである。

表層落葉下の淡褐色土は、場所によっては旧耕作土と考えられよう。その下には赤褐色土・褐色土が約20cm前後堆積する。場所によっては約80cm前後堆積している箇所もある。この層はあまり締っておらず、戦中の開墾による整地層かと考えられる。その下には灰黄色土があり、基盤層を崩して堆積したものと考えられる。従ってこの層も整地層といえよう。

そして、基盤層（地山）の赤色粘質土に至る。斜面部分は、落葉の下に薄く腐葉土の堆積があるものの、その下は淡青灰色や灰白色の粘質土となる。

また、調査区東部の拡張区斜面上部には灰黄色砂が約80cm程度堆積している。調査地北部の土塁状遺構西側では、表土直下が基盤層となる。基盤層は基本的に黄白色砂の下に赤褐色土が堆積している。酸化鉄層もところどころにみられる。

b　北山端地区　ヲノ坪窯跡と同様に常緑広葉樹及び竹林となっており、樹齢20～30年程度のシイが十数本生えている。

地表面の落葉の下に淡褐色土が約10～20cm堆積している。かつては畑地として利用されていたようで、西から東に向かって緩やかに傾斜する斜面を区切る段や溝が残されている。淡褐色土の下には灰黄色土が堆積する。調査区東部では、表土下に淡赤褐色土と暗黄灰色土が堆積しており、整地によるものと推定される。そして基盤層に至る。

2　主な遺構

a　ヲノ坪窯跡

土坑群ＳＫ１

いくつもの土坑が重なり合って形成されたのではないかと考えられる土坑群である。便宜上、ＳＫ１とした。調査区の東南部にあり、北東部の斜面上方、標高23m付近から大きな溝のように土坑が連続し、調査区南部に延びる。重なり合った土坑それぞれの切合いなどは検出できなかった。

検出した土坑群は南端部で最も低くなり、標高18m前後、表土下３m余りであり、斜面最上部との比高差は約５mとなる。平面形は、西側はほぼ直線的にそろうが、東側は屈曲し不整形である。最下地点から斜面中腹の標高20m地点までは、溝状に深く掘下げられた部分がある。幅１～1.5m、深さ１～1.2m程度で斜面に沿うように湾曲しながら上方に進む。

上部の土坑は検出面からの深さが約0.8～１mを測る。上端から緩く内湾して掘り下げられており、底はほぼ平面である。

さらに上方では、砂質土に幅２～2.5m、検出面からの深さ0.8m程の溝状に掘られている。

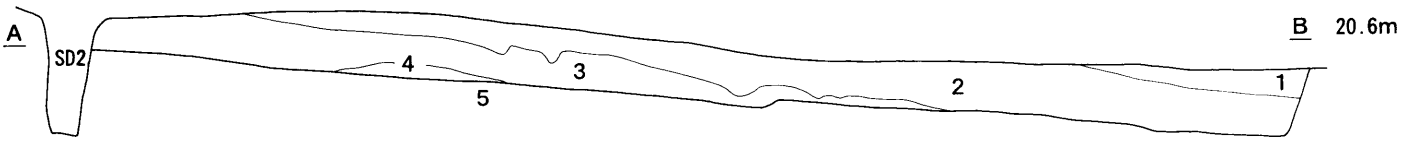
埋土中には、須恵器片、須恵質埴輪片とともに、熱を受けて固まったと思われる赤色粘土塊や、黒く焼き締まった窯壁塊が多数含まれていた。これらは土坑群の埋土中全域に含まれていたが、斜面最上部の砂質土に掘り込んだ部分は、斜面中腹から下部の部分に比べて多く含まれていた。

溝ＳＤ２

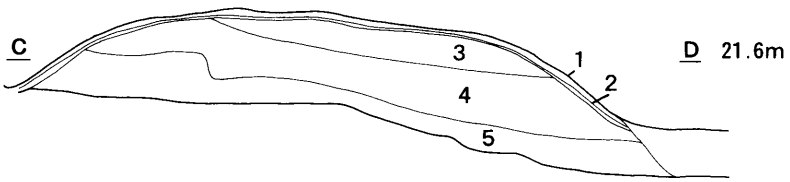
調査区の中央を東西に横断する。幅約0.5m、検出面からの深さ１～1.2mを測る。当初、北側に平行する土塁状遺構に伴うものと考えてもいたが、検出の結果、調査前に土塁と考えていたものは、開墾等によって地形が改変を受けた際に、手を加えられずに残された部分であろうことが判明した。また、溝埋土中から焼夷弾筒や、戦中・戦後のものと考えられる金属片などが検出されたことから、この溝は開墾時に竹などの根の進入を防ぐ目的で掘削されたものではないかと考えられる。

土塁状遺構

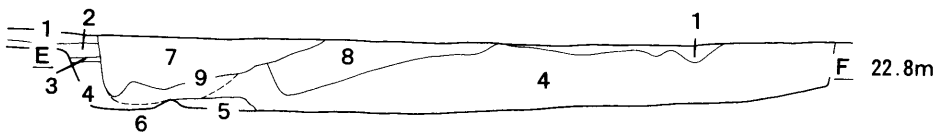
調査前には、近隣に峯治城跡、上津部田城跡など



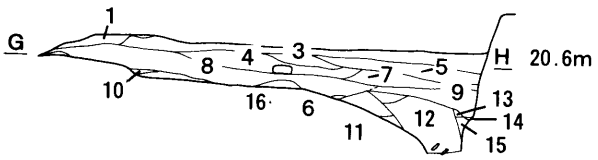
1．淡褐色土　　2．赤褐色土　　3．黒色土
4．灰黄色土　　5．赤褐色粘質土
図10　A－B土層断面図（1:80）



1．淡褐色土　　2．淡灰褐色土　　3．淡赤褐色土
4．淡灰黄色土　　5．淡赤色＋淡灰色粘質土の互層
図11　C－D（土壁状遺構）土層断面図（1:80）

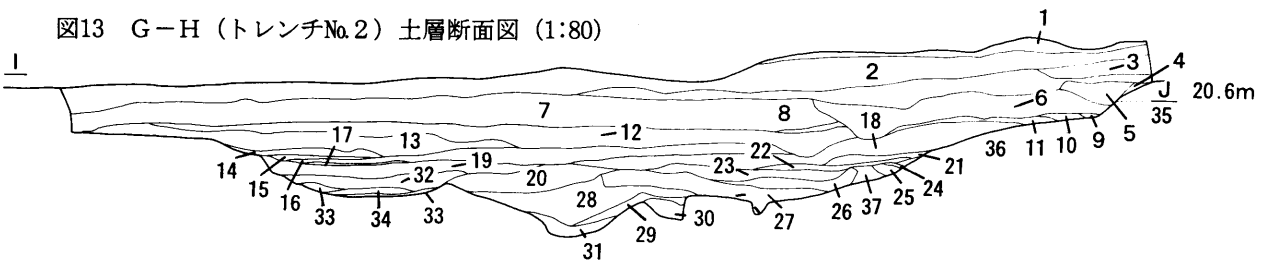


1．淡褐色砂質土　2．淡灰黄色砂　3．黒色砂　4．淡黄灰色砂
5．淡灰白色粘土　6．赤錆色岩　7．赤褐色土・焼土ブロックの互層
8．灰黄色砂・白黄色粘土塊の互層　9．淡赤褐色砂
図12　E－F（トレンチ№1）土層断面図（1:80）

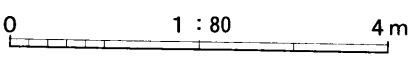


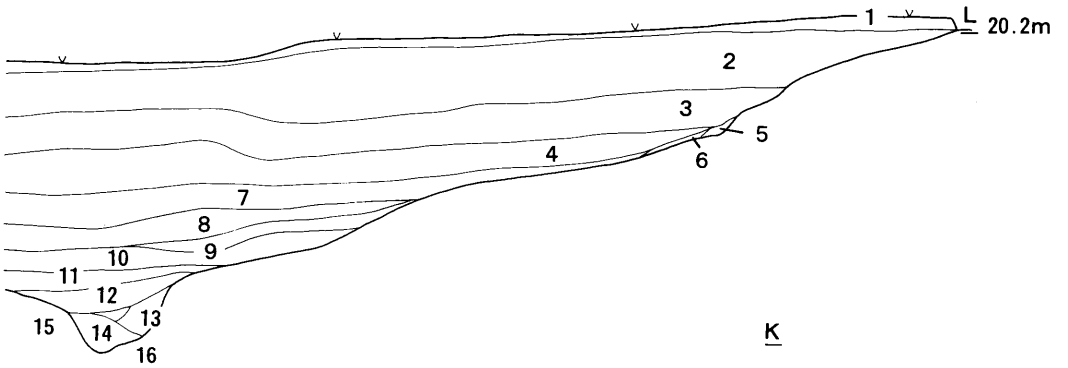
1．淡褐色砂　　2．淡黄灰色砂
3．未記入　　4．黄灰色砂・黄色粘土の互層
5．淡赤灰色砂・黄色粘土の互層　　6．赤白色粘土
7．淡灰白色粘土　　8．淡赤褐色砂
9．淡黄灰色砂　　10．橙色粘土
11．淡黄灰色砂　　12．灰黄色砂
13．赤白色粘土　　14．赤錆色岩
15．淡灰色砂　　16．黄灰色砂

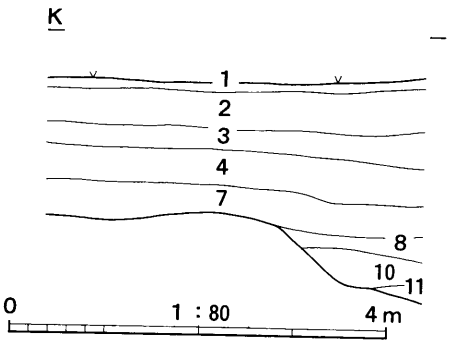
図13　G－H（トレンチ№2）土層断面図（1:80）



1．淡褐色土　　2．暗褐色土　　3．淡赤褐色土　　4．赤褐色粘質土
5．赤褐色土　　6．淡黄灰色砂質土　　7．赤褐色土　　8．灰黄色砂質土
9．暗褐色土　　10．明灰色粘土　　11．黄色砂　　12．灰黄色土
13．淡赤褐色土　　14．淡青灰色砂(灰混じり)　　15．淡灰黄色砂　　16．淡青灰色砂質土
17．淡青灰色砂　　18．淡黄灰色砂質土　　19．淡褐色砂　　20．褐色土
21．淡灰黄色砂　　22．未記入　　23．灰黄色砂質土　　24．淡灰褐色砂
25．淡黄灰色砂　　26．橙灰色土　　27．淡茶灰色砂　　28．暗赤褐色砂質土
29．黄灰色砂　　30．淡赤褐色土・礫の互層　　31．黄褐色砂質土　　32．淡黄灰色砂
33．青灰色砂(灰混じり)　　34．暗褐色砂　　35．灰黄色砂　　36．灰白色粘土
37．淡黄灰色砂
図14　I－J（土坑群）土層断面図（1:80）

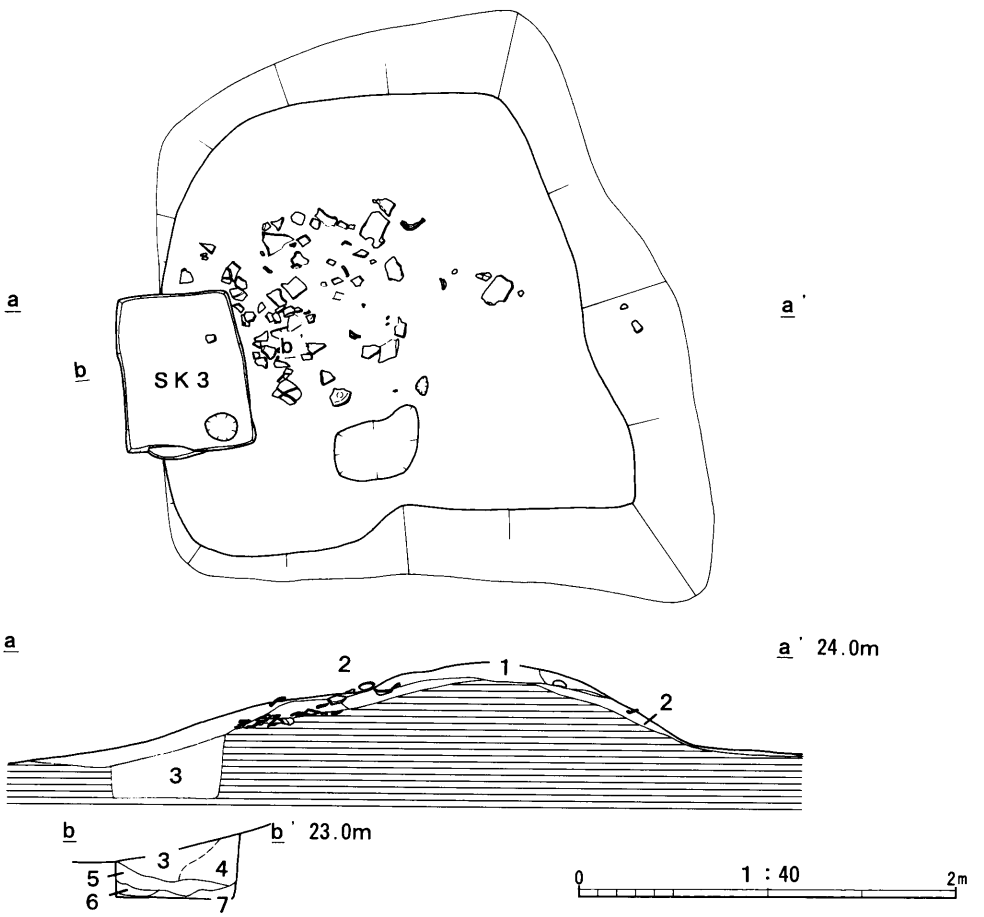






1．淡褐色土　　2．淡赤褐色土
3．淡茶灰色砂質土　　4．茶灰色砂質土
5．赤褐色土　　6．黄褐色土
7．茶灰色砂質土　　8．暗茶灰色砂質土
9．赤茶色土　　10．黄灰色土
11．茶灰色砂質土　　12．淡灰色砂質土
13．暗橙色土　　14．暗茶灰色砂質土
15．13と14の互層　　16．淡青灰色粘土

図15　K－L土層断面図（1:80）



1．淡黄色土　　2．淡褐色土　　3．黒色土（軟らかい）
4．黄褐色土粒の混じった黒色土　　5．暗黄灰色土　　6．暗黄色土
7．褐色土（焼土）

図16　土墨状遺構　土器群出土状況実測図（1:40）

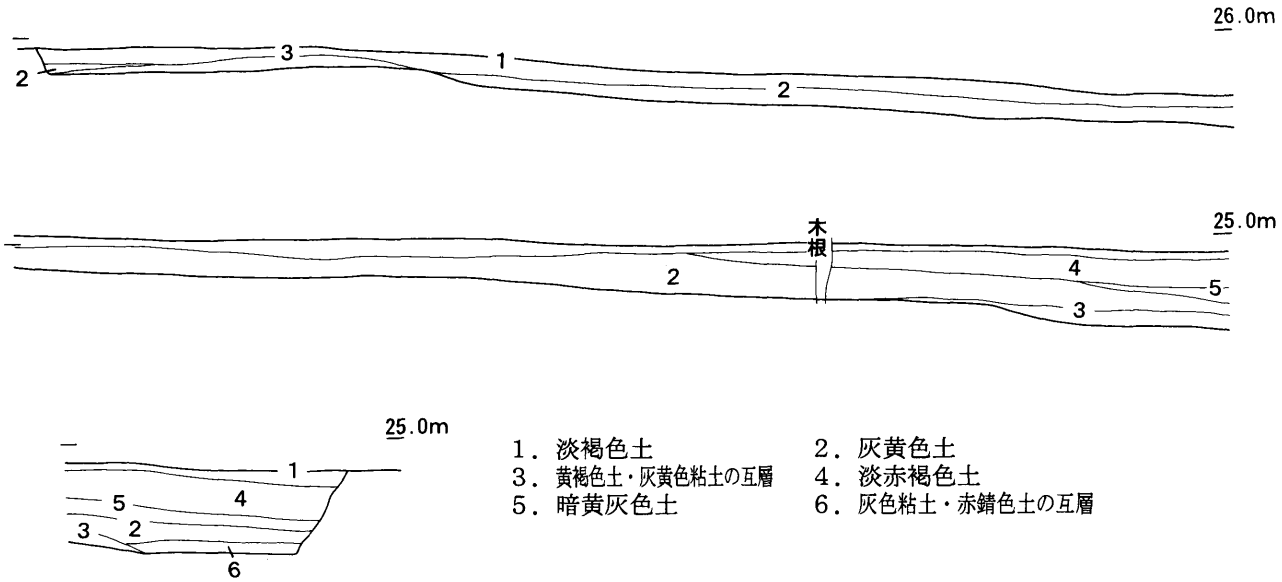


図17　北山端地区　調査区北辺土層図

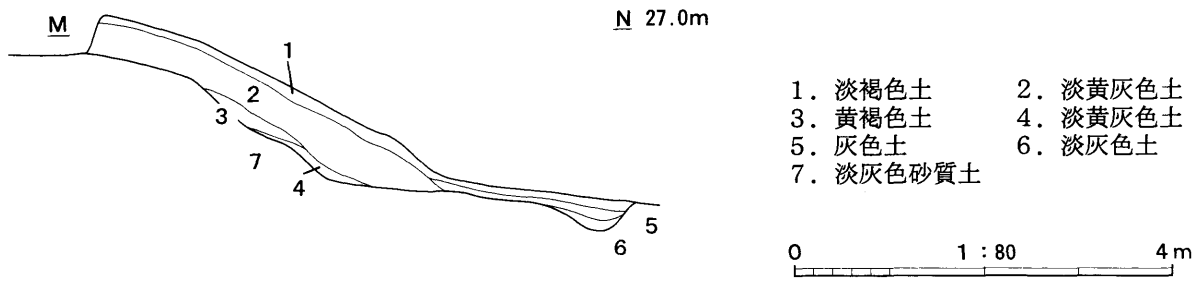


図18　北山端地区　M－N（土壇状遺構）土層図

の中世城館が存在することから、何らかの城館にともなう遺構であろうと推測していた。しかし当該時期の遺物が１点もないこと、また、ほぼ頂上部のマウンド状の部分の表土直下から須恵器片や、須恵質埴輪片が小さな破片ばかりながら数十個まとまって検出されたことなどから、中世城館にともなうものではなく自然地形の斜面が、東側は開墾され溝に切られたが、西側は加工されずに残された部分であることが判明した。

遺構ではないが頂上部のマウンドで検出された土器群についてここで触れたい。

検出した土器片は大半が小片である。頂上部よりもさらに0.2～0.3m高いマウンドの上面に散乱していた。その配置には特に意味を持つように思えないが、自然地形の残された部分から検出されたという点で、投棄された際の位置を保っていたのではないかと考えられる。

また、この土器群の南部から、土器群を切込んで方形の土坑ＳＫ３が検出された。埋土には炭化物が多く含まれており、周囲の壁は熱を受け赤変していた。出土遺物が無いため断定はできないが、埋土が柔らかく、新しいものという印象を受ける。

b　北山端地区

当初、土壇状遺構と考えていたマウンドは調査の結果、頂上部、斜面、及び周辺からは遺構遺物ともに検出できず、開墾、整地の際に取り残されたであろう「高まり」であることが判明した。近代以降の施釉陶器の小片がごく少量上層から出土したのみであるため、整地の時期を特定することも困難である。

なお、焼夷弾筒１点とその付属部品である安定尾部、及び弾筒の蓋と思われる金属製品が出土した。

Ⅳ．調査の成果 －遺物－

今回の調査で出土した遺物は整理箱に70箱程度である。主として古墳時代の須恵器、須恵質埴輪、及び窯壁塊、焼土塊などである。他には太平洋戦争末期の焼夷弾があるが、古代～近世の遺物は発見されず、わずかに近代以降の施釉陶器がごく少量検出されたにすぎない。極めて限定された時期の遺跡であることが窺える。

以下に記述するが、詳細は観察表をもって代える。

1　古墳時代の遺物

a　須恵器

整理箱に20箱余り出土した。土塁状遺構の上位面からまとまって出土した中に、ある程度の大きさまで接合できるものがあるが、大半が４分の１から６分の１以下の細片である。焼成時のものと思われる歪み、膨れを持つものが多く、出土量に比べて図示できるものは少ない。蓋杯が９割以上を占めるものと思われるが、少量ながら高杯、甕、壺、瑳なども出土している。

杯蓋（１～28）

出土したもの全てが天井部と口縁部の境に稜を持つ。復元口径が12cm～14cm強となるが、中に16cm程度に復元できるもの（20･22･24）もある。口縁部がほぼ垂直になるものと、口縁端部が外反するもの、口縁部全体が外反するものがある。ほぼ垂直になるものは口縁高が２cm以上あり、端部に段をなす。口縁部全体が外反するものは、それ自体が短い。天井部外面をヘラ削りする他は、ロクロナデによる調整が施される。稜の直近までヘラ削りを施すものと、稜から上方に１単位はロクロナデを残すものがある。

杯身（29～55）

立ち上がりがほぼ垂直になるものと、やや内傾するもの、内傾した立ち上がりに口縁端部が外反しているものがある。また、強く内傾し立ち上がりが低いもの（52･53）がある。

その他の須恵器(56～62)

口縁部のみであるが瑳と推定される破片(55)、高杯（低脚(58･59)及び長脚(60))、壺口縁部(61)、甕(62)などがあるが、量的には出土した須恵器の数%にすぎない。

b　埴輪

出土した埴輪は整理箱に20数箱に登る。大半が円筒埴輪（朝顔形埴輪を含む）であるが、わずかながら家形埴輪片や人物埴輪片もある。大部分が須恵質または硬質に焼成されている。中には暗赤褐色を呈し、焼き締められたような様相の個体もある。

円筒埴輪（朝顔形埴輪を含む）(63～93)

総量としてはかなりの量があるが、全形を復元するに至る個体はなく、かつ焼き歪みが激しいものが多いことから図示できる個体も限られてしまった。

出土した全ての底部破片に、蔓などをリング状にしてはめていた痕跡であると考えられている段が認められた。突帯は低いM字のものがほとんどである。口縁部はヨコナデにより端面をつくっている。中には丸く収まり端面を有しないものもある。外面調整は、タテハケの後、ヨコハケを施す。しかし、基部にはヨコハケは行われず、タテハケのみとなる。ヨコハケは廉状となる部分が見あたらないことから、川西宏幸氏のいうＣ種ヨコハケではないかと考えられるが、小片ばかりのため疑問の余地は残る。

朝顔形埴輪は焼成が悪く、土師質程度のものが多い。頚部の小片から朝顔形埴輪と判断したもので、円筒部まで復元できるような全体を窺える個体はなかった。

器財埴輪及び形象埴輪(94～99)

小片ばかりであるが、家形埴輪の屋根端部、人物埴輪頭髪、同衣裾などが認められる。

2　その他の遺物

石器類(107～118)

包含層遺物であるが、石鏃、スクレイパー、敲石、磨製石斧などが出土した。共伴遺物がないので時期は決しがたいが、形状から弥生期のものであろう。他には、砥石と考えられる石片が出土した。

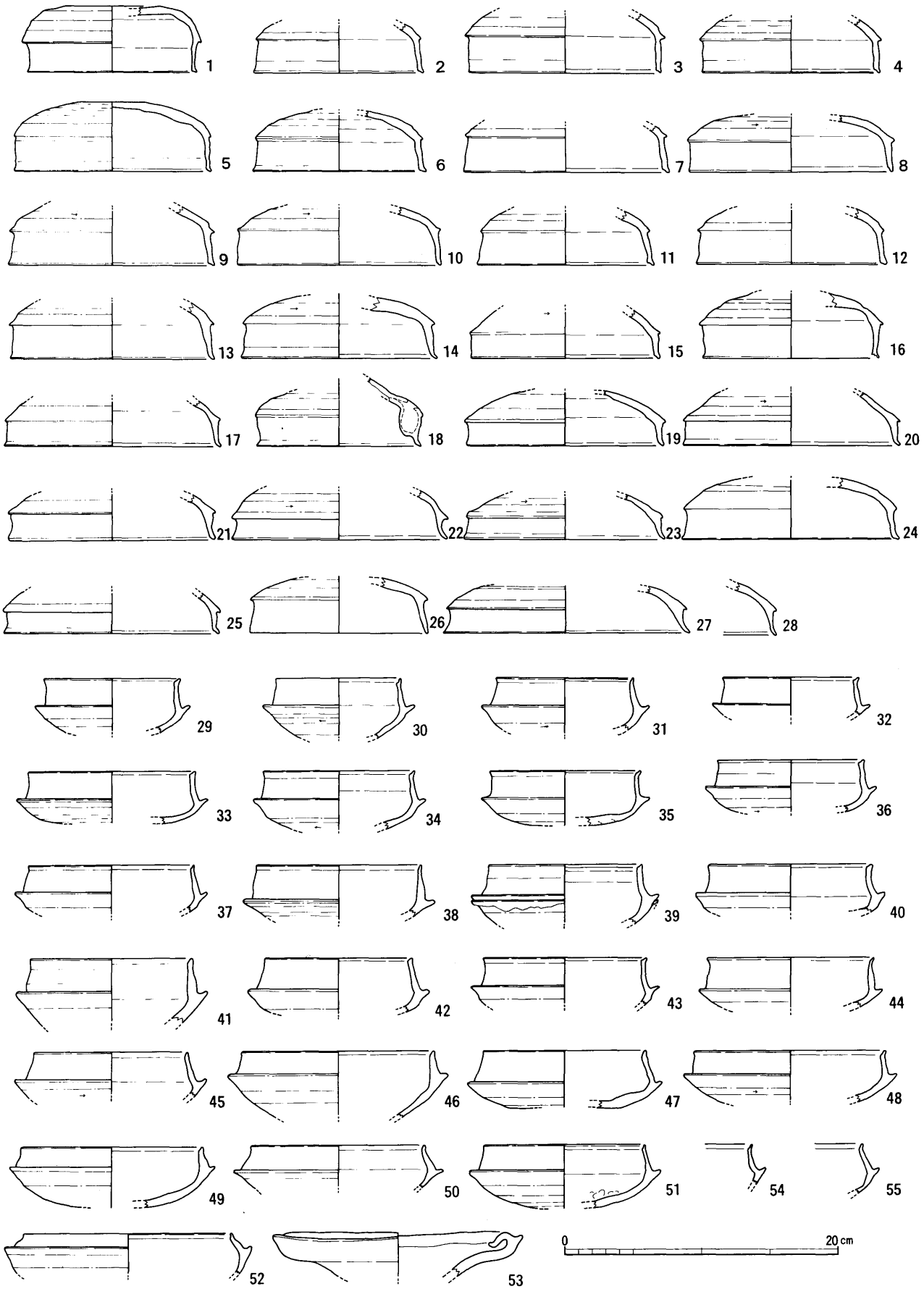


図19. 出土須恵器実測図（1）(1:4)

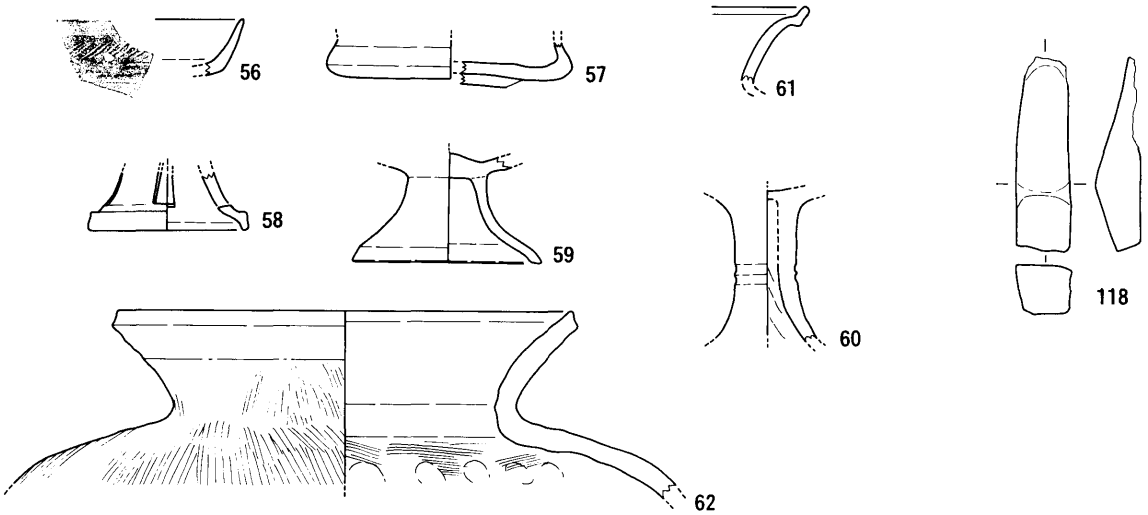


図20　出土須恵器実測図（2）・その他の遺物実測図（1:4）

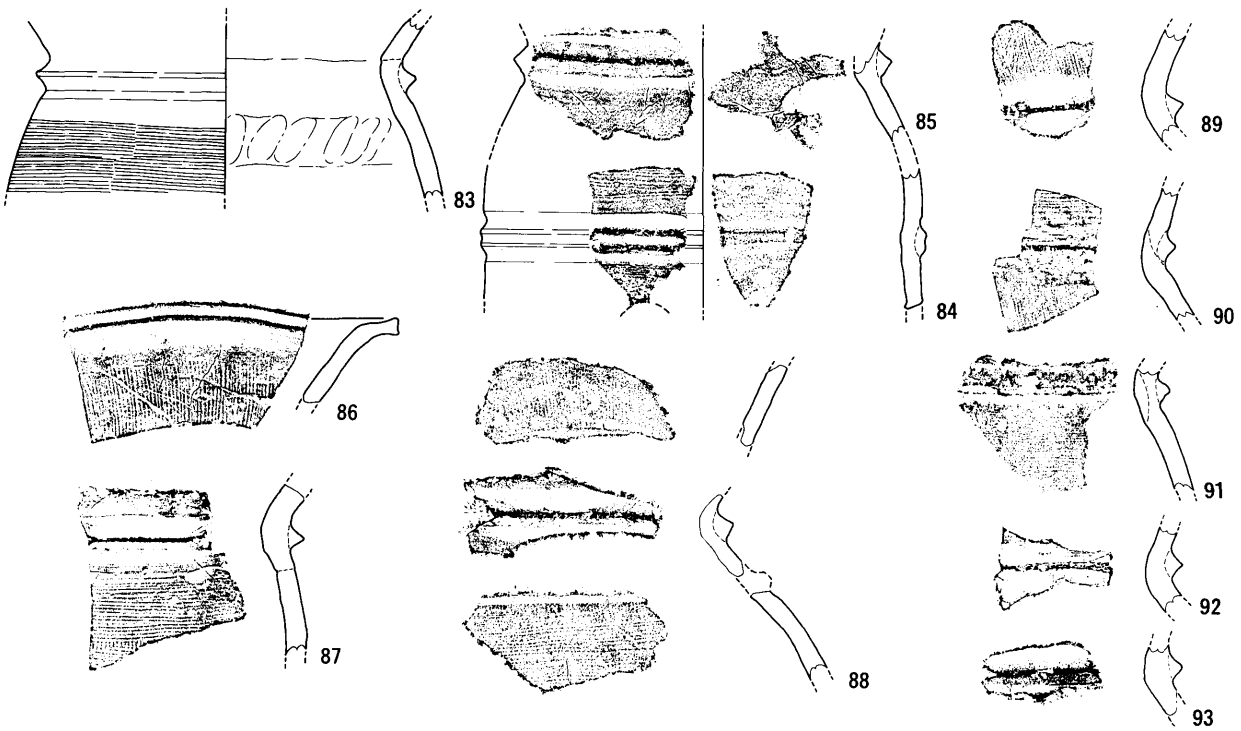


図21　出土朝顔形埴輪実測図（1：4）

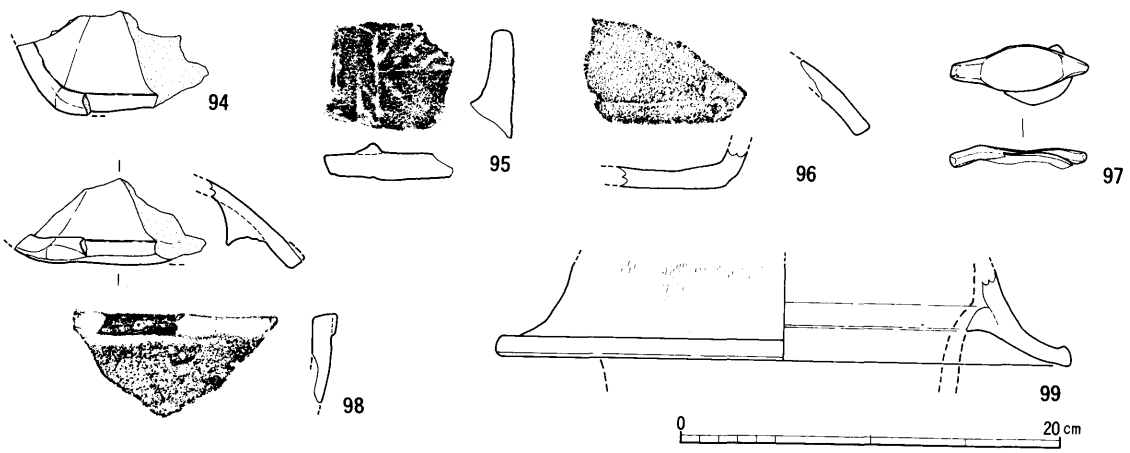


図22　出土器財埴輪及び形象埴輪実測図（1:4）

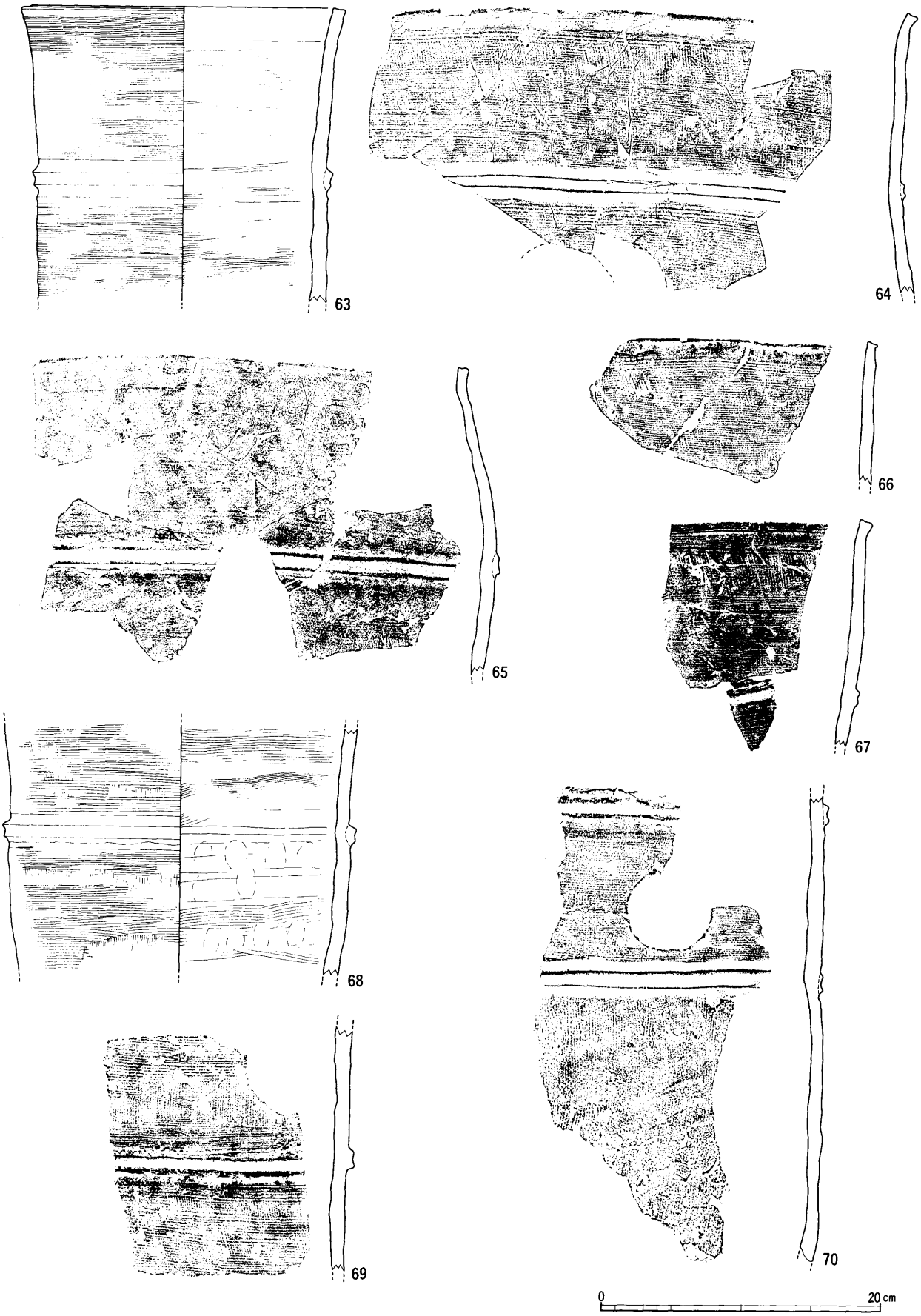


図23. 出土円筒埴輪実測図 (1) (1:4)

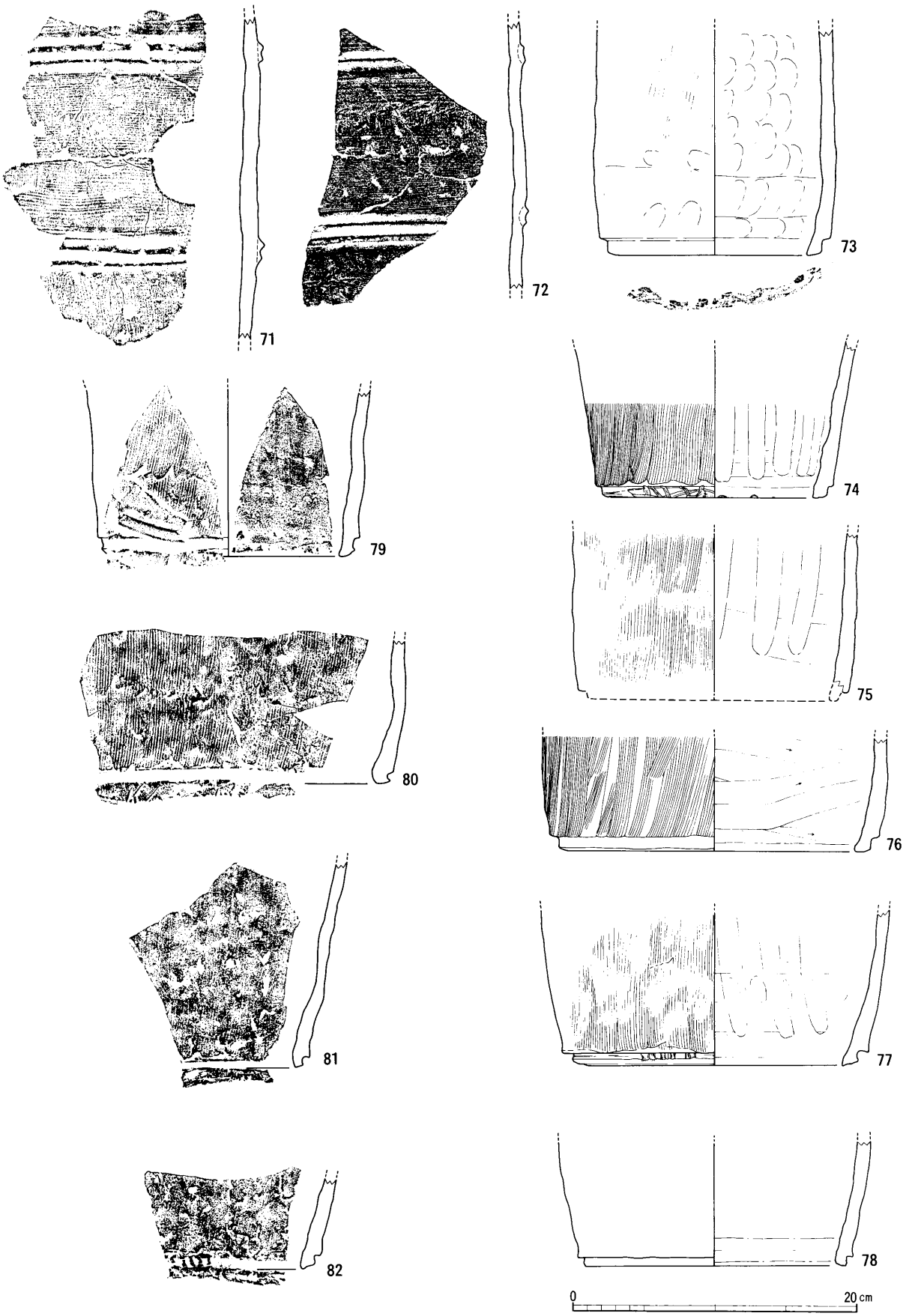


図24. 出土円筒埴輪実測図 (2) (1:4)

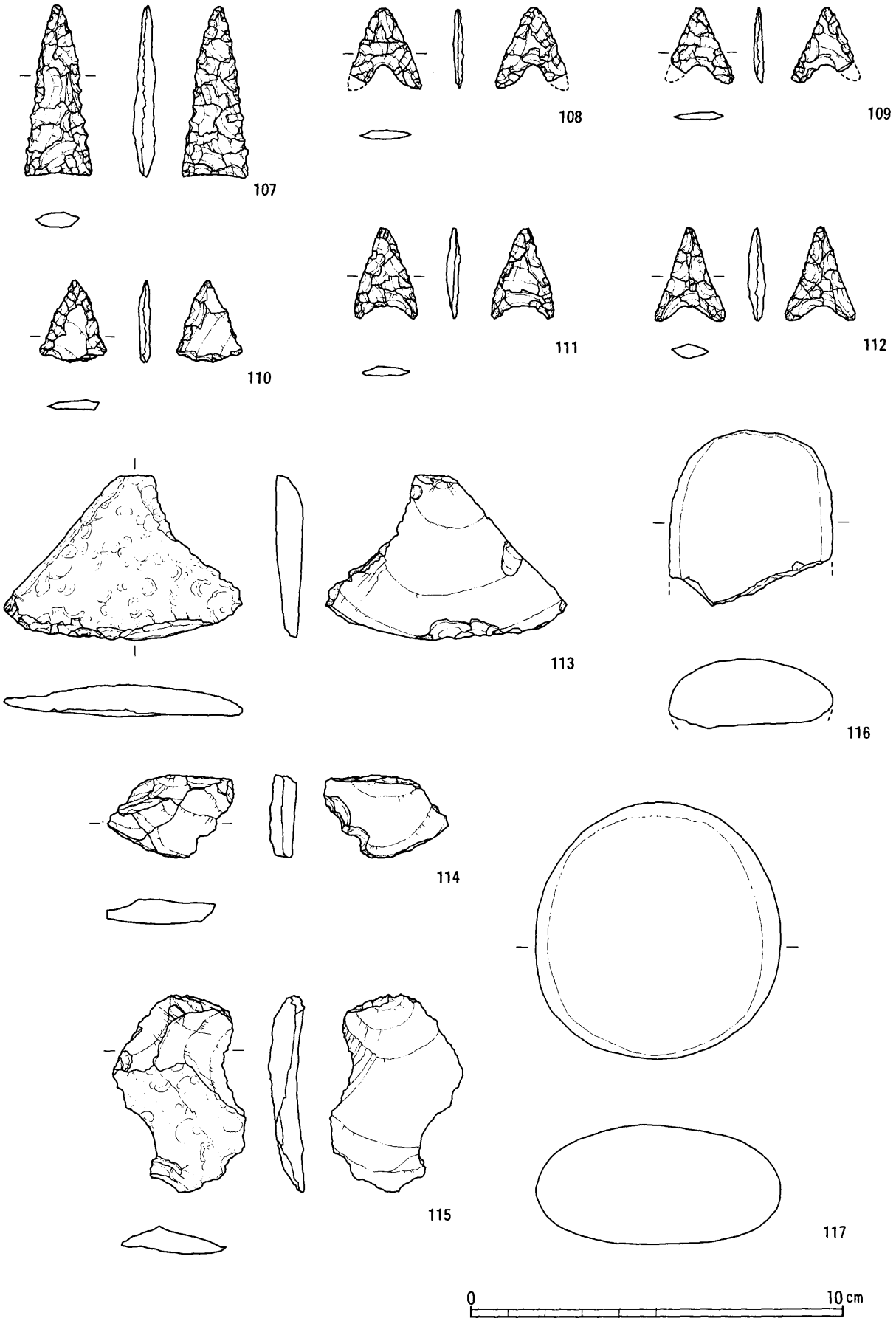


図25　出土石器類実測図（2:3）

3　戦争関係遺物(100～106)

発見された焼夷弾等戦争関係遺物は、ヲノ坪窯跡、北山端地区あわせて整理箱８箱を数える。

発見された焼夷弾筒は全長49.5cm、直径８cmで円筒である。頭部から約３cm程を６角形に絞る。また、尾部は端から4.5cmのところから絞られ、端部で直径７cmとなる。高高度から投下され地面に突き刺さったものであるから、当然ながら伴う遺構はない。

出土状況はほぼ垂直になっているもの、斜めになっているものなど様々である。先端は地表下約30cm～１mまで到達しており、地山の粘土が高温により焼き付いているものが多い。尾部には1.5cm程塗装が残っているものもある。また、洗浄中に頭部内から信管が発見された。全体に赤錆が付着しているため、鉄製と考えられるが、軽量であるため合金である可能性もある。

北山端地区から発見された鉄製品は、弾筒の尾部に取り付けられ、落下時の姿勢を垂直に保ち速度を低減させる安定尾部と呼ばれるものである。また、弾筒尾部の蓋も発見された。

焼夷弾のほか、Ｍ６３型通常爆弾の破片も１点発見された。

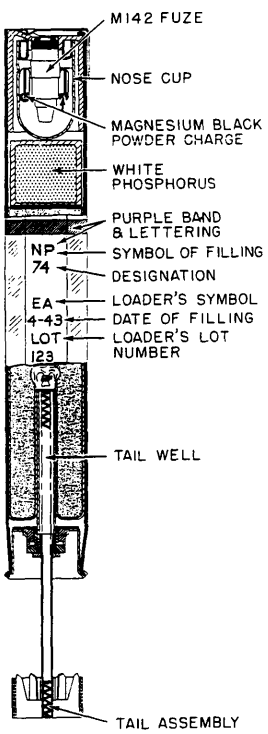


図27　10ポンド焼夷弾M74構成図（雲井氏提供）

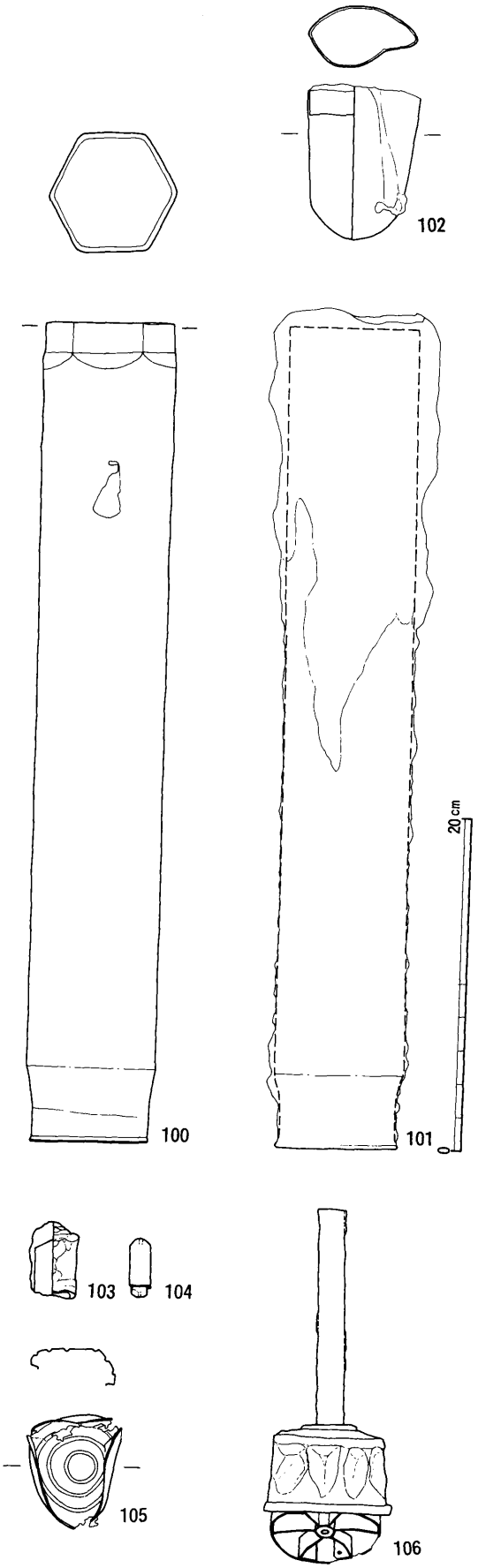


図26　出土焼夷弾実測図（1:4）

出土須恵器一覧表

報告No.	整理No.	種類	器種	出土位置	口径	底径	鍔径	器高	調整・技法の種類	胎土	焼成	色調	遺存度	備考
1	030-02	須恵器	杯蓋	土墓上土器群No.92	12.3		13.0	4.9	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ					
2	007-07	須恵器	杯蓋	K-6ＳＫ１	12.5		12.0		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗	良	灰	小片	
3	006-04	須恵器	杯蓋	表採	14.0		14.6		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	軟	灰	小片	焼き悪く瓦質に近い
4	007-02	須恵器	杯蓋	K-4ＳＫ１	13.0		13.2		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	良	灰	小片	
5	016-02	須恵器	杯蓋	土墓上土器群No.6	14.4		14.2	5.1	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ					
6	001-05	須恵器	杯蓋	M-5包含層	12.5		12.2		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	密	良	灰白	1/4	
7	007-05	須恵器	杯蓋	K-6ＳＫ１	15.0		14.8		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗	良	灰	小片	外面に自然釉
8	008-07	須恵器	杯蓋	J-4ＳＫ１	15.0		15.2		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗	良	灰	1/8	
9	007-01	須恵器	杯蓋	J-4ＳＫ１	14.8		15.0		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗	良	灰	小片	
10	007-06	須恵器	杯蓋	K-6ＳＫ１(下)	15.0		15.0		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗	良	灰	小片	
11	001-06	須恵器	杯蓋	K-5包含層	12.8		12.4		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	並	明褐灰	1/8	
12	003-02	須恵器	杯蓋	K-5ＳＫ１	14.0		13.6		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗い	やや良	灰白	1/8	
13	008-04	須恵器	杯蓋	J-4ＳＫ１	14.8		14.8		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	良	灰	小片	
14	006-03	須恵器	杯蓋	K-6ＳＫ１	14.3		14.0		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	良	灰褐	小片	
15	006-01	須恵器	杯蓋	K-4ＳＫ１	14.0		14.0		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	良	灰	小片	
16	030-03	須恵器	杯蓋	土墓上土器群No.5	12.8		13.4		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ					
17	001-08	須恵器	杯蓋	J-3包含層	15.7		15.6		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	並	灰	1/6	
18	002-02	須恵器	杯蓋	J-4包含層	12.0				ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	密	良	良	1/4	歪み、焼き膨れ
19	001-02	須恵器	杯蓋	N-5包含層	14.0		14.6		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	密	良	灰白	1/6	
20	006-08	須恵器	杯蓋	K-4ＳＫ１	16.0		16.0		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	良	灰	小片	
21	003-03	須恵器	杯蓋	L-7ＳＫ１	15.0		15.1		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗い	並	灰・灰白	1/8	
22	006-06	須恵器	杯蓋	K-4ＳＫ１	16.0		16.0		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗	やや軟	灰	小片	
23	008-08	須恵器	杯蓋	J-4ＳＫ１	14.6		14.3		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗	良	灰	1/8	
24	003-01	須恵器	杯蓋	K-5ＳＫ１	16.0		15.6		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	粗（2mm小石）	良	灰	1/8	
25	007-03	須恵器	杯蓋	J-4ＳＫ１	15.6		15.8		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	良	灰	小片	
26	003-04	須恵器	杯蓋	K-8ＳＫ１	13.0		13.2		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	粗い	並	灰	1/8	
27	001-07	須恵器	杯蓋	K-4包含層	18.0		17.5		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	密	良	灰白	小片	
28	005-06	須恵器	杯蓋	K-4ﾄﾚﾝﾁNo.2					ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗	やや良	灰	小片	
29	004-03	須恵器	杯身	K-5ＳＫ１	10.0		11.4		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗い	並	灰・灰白	1/8	
30	008-06	須恵器	杯身	J-4ＳＫ１	9.0		11.0		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗	良	灰	1/4	焼き歪みにより楕円形
31	003-07	須恵器	杯身	包含層	10.0		12.2		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	粗い	並	灰	1/8	
32	004-02	須恵器	杯身	L-7ＳＫ１	10.0		11.6		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部欠損のため不明	やや密	並	灰ｵﾘｰﾌﾞ・灰白	1/8	
33	005-01	須恵器	杯身	K-5ＳＫ１	12.0		14.0		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	良	灰白・灰白	1/8	
34	004-05	須恵器	杯身	K-5ＳＫ１	10.8		12.5		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗い	並	灰	1/6	
35	003-06	須恵器	杯身	K-8ＳＫ１	11.0		12.2		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	粗い	並	灰・灰白	1/8	
36	006-02	須恵器	杯身	K-4ＳＫ１	10.7		12.5		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	良	浅黄	小片	
37	005-04	須恵器	杯身	K-5ＳＫ１	12.0		14.0		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗	並	灰・灰白	1/8	
38	004-08	須恵器	杯身	L-5ＳＫ１	12.0		14.0		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	並	暗青灰・青灰	1/6	
39	030-01	須恵器	杯身	土墓上土器群No.53	11.2		13.7		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ					
40	004-06	須恵器	杯身	L-6ＳＫ１	12.0		13.8		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗い	良	灰	1/6	
41	001-03	須恵器	杯身	K-5包含層	11.5		13.6		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	密	良	灰	1/4	蓋破片溶着
42	004-01	須恵器	杯身	J-5ＳＫ１	10.6		13.3		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	並	ｵﾘｰﾌﾞ・灰	1/6	歪み大
43	005-02	須恵器	杯身	K-5ＳＫ１	12.0		13.8		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	やや良	淡黄・灰白	1/8	
44	003-05	須恵器	杯身	K-8ＳＫ１	12.0		13.4		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗い	並	灰	1/10	
45	007-04	須恵器	杯身	K-6ＳＫ１(下)	11.0		14.0		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	良	灰	小片	
46	002-01	須恵器	杯身	N-5包含層	13.8		16.0		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	密	良	灰	1/6	杯蓋か？
47	003-08	須恵器	杯身	G-6土墓包含層	12.0		14.4		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗い	並	青灰・灰	1/8	
48	006-05	須恵器	杯身	K-4ＳＫ１	14.0		15.5		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	良	灰	小片	
49	005-03	須恵器	杯身	K-5ＳＫ１	13.4		14.9		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗	並	灰白・灰	1/8	
50	001-04	須恵器	杯身	M-5包含層	12.3		15.2		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	粗い	並	灰	1/6	
51	004-07	須恵器	杯身	L-6ＳＫ１	11.6		13.9		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	粗い	並	灰・灰白	1/4	
52	008-05	須恵器	杯身	J-4ＳＫ１	15.2		18.0		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	良	灰	1/8	
53	004-04	須恵器	杯身	J-4ＳＫ１	16.0		18.2		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗い	並	灰	1/8	歪み強い
54	005-08	須恵器	杯身	L-6ＳＫ１					ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗	並	灰	小片	
55	005-07	須恵器	杯身	L-7ＳＫ１					ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底部外面ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗	並	灰白・灰	小片	
56	002-06	須恵器	ﾊｿｳ	C-3表土	8.0				ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　ヘラ刻み	やや密	良	灰	口縁部小片	
57	002-05	須恵器	不明	K-6ＳＫ１		外径13.0			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	灰	1/8	別個体が溶着
58	006-07	須恵器	高杯　脚	K-6ＳＫ１		8.5			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	やや密	良	灰	小片	底脚一段
59	001-01	須恵器	高杯	I-7包含層	－	10.0	－		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	やや密	良	青灰	1/8	
60	002-04	須恵器	高杯	G-7表土		3.2			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　凹線２条	密（微砂粒）	並	鈍い橙	脚柱のみ	
61	008-02	須恵器	壺	K-6ＳＫ１	18.0				ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	やや粗	良	灰	小片	口縁部のみ
62	014-01	須恵器	壺	K-5ＳＫ１	24.0				口縁部ヨコナデ　体部外面ハケ調整	やや粗(3～5mm)	並	灰白	口縁部1/3	

出土円筒・朝顔形埴輪一覧表

報告No.	整理No.	出土位置	種類	部位	径	タガ　幅	タガ高さ	外面調整	内面調整	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
63	027-01	土墓上土器群40,65,87,89,90,93,117	円筒	口縁～体部	23.0	2.7	0.5	ﾖｺﾊｹ	ﾖｺﾊｹ	硬質	灰黄褐	にぶい橙	やや密、微砂粒多い	
64	025-01	土墓上土器群38,44,66,102,103	円筒	口縁部		2.2	0.3	ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ	ﾖｺﾊｹ	硬質	灰白	にぶい褐	やや粗い（1～2㎜の小石を含む）	
65	018-01	土墓上土器群52,86,94	円筒	口縁部		2.1	0.4	ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ	ﾖｺﾊｹ	須恵質	暗赤褐	淡灰	密（白細粒を含む）	歪み大きく内湾する
66	017-01	土墓上土器群1	円筒	口縁部				ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ	ﾖｺﾊｹ	須恵質	暗灰	暗灰	密（白細粒を含む）	部分的に暗褐色
67	016-01	土墓上土器群39,48,50,95.	円筒	口縁部		2.2	0.4	ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ	ﾖｺﾊｹ	硬質	淡橙	淡灰	密	歪み大
68	028-01	土墓上土器群60,72	円筒	体部	25.2	2.5	0.6	ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ	ﾖｺﾊｹ＋ﾖｺﾅﾃﾞ	須恵質	黄灰	灰	やや密、微砂粒多い	
69	019-01	土墓上土器群	円筒	体部		2.5	0.6	ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ	ﾖｺﾊｹ	やや硬質	淡灰	淡灰	やや粗い（白粒を含む）	表面はザラザラしている
70	026-01	土墓上土器群51,52	円筒	体部				中段はﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ、下段はﾀﾃﾊｹのみ	ﾖｺﾊｹ後ﾅﾃﾞ	硬質	灰白	灰黄褐	やや粗い（1～2㎜の小石を含む）	
71	024-01	土墓上土器群4,71,96,110	円筒	体部				ﾀﾃﾊｹ後上、中段はﾖｺﾊｹ、下段はﾀﾃﾊｹのみ	ﾖｺﾊｹ	硬質	灰黄褐	灰黄褐	やや粗い（1～2㎜の小石を含む）	丸スカシ
72	029-01	土墓上土器群64,97,105,107	円筒	体部				ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ	ﾖｺﾊｹ後ﾅﾃﾞ	硬質	灰	灰	やや密、微砂粒多い	
73	023-01	土墓上土器群45,46,47,73	円筒	底部	15.0			ﾀﾃﾊｹ	ﾅﾃﾞ＋ｵｻｴ	硬質	灰赤	灰褐	やや粗い（1～2㎜の小石を含む）	
74	022-01	J-3SK-1	円筒	底部	16.6			ﾀﾃﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ後ﾀﾃﾅﾃﾞ	やや硬質	暗橙	淡灰	密	
75	028-02	土墓上土器群2,56,88	円筒	底部	20.0			ﾀﾃﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ＋ﾅﾃﾞﾌﾞｹﾞ	硬質	灰白	灰白	やや密、微砂粒多い	外面は磨滅進む
76	020-01	土墓上土器群9,116	円筒	底部	22.0			ﾀﾃﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ＋ｵｻｴ	やや硬質	淡灰	淡灰	やや密	表面はザラザラしている
77	027-02	土墓上土器群8,109	円筒	底部	20.2			ﾀﾃﾊｹ	縦方向のﾅﾃﾞ＋ｵｻｴ	須恵質	灰	灰	やや密、微砂粒多い	
78	021-02	J-3SK-1	円筒	底部	18.5			ｲﾀﾅﾃﾞ（不明瞭）	ﾖｺﾅﾃﾞ（不明瞭）	硬質	暗灰	暗赤褐	やや粗い	
79	002-03	K-5SK-1土層	円筒	底部	18.2			ﾀﾃﾊｹ	ﾅﾃﾞ＋ｵｻｴ	須恵質	灰	灰白	密	壷口縁部溶着
80	017-02	土墓上土器群22,23,81	円筒	底部				ﾀﾃﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ	硬質	淡灰	淡灰	密	歪み大
81	020-02	J-3SK-1	円筒	底部				ﾀﾃﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ＋ｵｻｴ	須恵質	暗赤褐	暗赤褐	やや粗い（1～2㎜の小石を含む）	
82	021-01	J-3SK-1	円筒	底部				ﾀﾃﾊｹ（不明瞭）	ﾖｺﾅﾃﾞ	硬質	暗赤褐	暗赤褐	やや密	外面の調整は不十分
83	010-01	K-4SK-1	朝顔	頚部		1.9	0.9	ｲﾀﾅﾃﾞ後ﾖｺﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ＋ｵｻｴ	土師質	浅黄	橙	密	頚部突帯外径20.0cm
84	013-01	K-5 包含層	朝顔	体部	23.4	1.8	0.2	ﾖｺﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ	土師質	橙	橙	密	丸スカシ
85	013-01	K-5 包含層	朝顔	頚部		1.6	0.8	ﾖｺﾊｹ	ﾅﾃﾞ	土師質	橙	橙	密	
86	010-02	J-3SK-1	朝顔	頚部	20.0	1.7	0.8	ﾖｺﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ	硬質	浅黄	橙	密	
87	010-05	J-3SK-1	朝顔	口縁部				ﾀﾃﾊｹ、端部ﾖｺﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ	硬質	浅黄	橙	密	
88	012-01	K-4SK-1	朝顔	頚部		1.8	1.0	上部ﾀﾃﾊｹ、体部ﾖｺﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ	土師質	橙	橙	密	
89	010-04	K-5SK-1	朝顔	頚部		1.5	0.9	ﾀﾃﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾅﾒﾅﾃﾞ	土師質	にぶい橙	にぶい橙	密	
90	009-02	K-5SK-1	朝顔	頚部		2.1	1.0	体部はﾀﾃﾊｹ、花部はﾖｺﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ	須恵質	灰白	灰白	やや密	
91	009-01	K-5SK-1	朝顔	頚部		1.7	0.7	ﾖｺﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ	硬質	灰褐	浅黄	やや粗い（白粒を含む）	
92	012-03	J-3SK-1	朝顔	頚部		1.9	1.0	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	硬質	明褐灰	明褐灰	密	
93	010-03	K-4SK-1	朝顔	頚部		1.7	0.7		ｲﾀﾅﾃﾞ	土師質	橙	橙	密	

出土器財埴輪及び形象埴輪一覧表

報告No.	整理No.	出土位置	種類	部位	調整	焼成	色調	胎土	備考
94	011-04	K-5 SK-1	家形(?)	屋根(?)		硬質	浅黄	密	
95	013-03	K-2表土	家形(?)	屋根(?)		土師質	淡黄	密	
96	011-02	K-5包含層	家形(?)	屋根(?)		土師質	にぶい橙	密	
97	015-04	L-4包含層	家形(?)	屋根(?)		土師質	浅黄	密	
98	011-01	K-5 SK-1	人物	頭髪		須恵質	灰	密	
99	015-01	J-3包含層	人物	衣裾部	外面にﾀﾃﾊｹが残る	硬質	にぶい橙	密	

出土石器類一覧表

報告No.	整理No.	出土位置	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重（cm）	備考
107	039-01	K-4トレンチNo.2淡灰黄砂質土	石鏃	4.59	1.80	5.02	3.25	
108	035-02	J-5SK 1	石鏃	2.14	1.90	0.23	0.63	
109	036-02	K-6SK 1	石鏃	2.00	1.10	0.12	0.48	
110	035-01	J-5SK 1	石鏃	2.18	1.73	0.31	0.98	
111	037-01	J-7包含層	石鏃	2.40	1.63	0.30	0.85	
112	036-01	K-6SK 1	石鏃	2.50	1.86	0.42	1.00	
113	038-01	E-3表土	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	4.45	6.39	0.82	19.61	RFを利用したものか
114	033-01	K-5SK 1	RF	2.21	3.40	0.69	5.25	
115	033-02	J-3トレンチ	ﾌﾚｲｸ	5.30	3.59	0.61	11.64	
116	034-02	I-6包含層	磨製石斧	4.73	4.43	1.75	47.42	
117	034-01	K-5SK 1	敲石	6.98	6.55	3.20	209.20	
118	002-07	K-4SK 1	砥石	10.20	3.00	2.60	87.25	

Ⅴ．調査のまとめ

1　窯跡か　ヲノ坪窯跡の調査では、窯本体は検出できなかった。しかしながら、次の点から窯跡と呼称することとした。まず第一に調査地の遺構埋土中から、窯壁塊が、整理箱８箱分検出されたこと、熱を受けて固まったと考えられる粘土塊も同じく整理箱に１４箱分検出されたことなどがあげられる。

窯壁塊は大きいものでは10cm余り、握り拳大の大きさのものもある。内面は黒色に炭化しており、高熱を受けていたことを示している。中には、ガラス化した灰が付着するものもある。

さらに、土坑内及び整地層などから出土した土器類は、そのほとんどが須恵器と須恵質埴輪であるが、焼き膨れや他の個体の溶着がある個体や、極度の焼き歪みを持った個体が相当量認められた。

これらのことから、窯本体の検出には至らなかったものの、本調査地の近傍に所在したものと考えるに至った。

また、遺跡の所在する地域は地質学的には奄芸層群と呼ばれる地層に立地している。奄芸層群は層によっては陶土となる粘土を産出することで知られる。

このことも、この地が窯業遺跡であることの傍証となろう。

2　窯の位置　では、窯はどこにあったと考えるべきか。推定を試みてみたい。調査区が所在するのは南西に面した緩やかな斜面である。ここを中心に考えることとする。

１つの方向として、さらに南東方向に進んだところ、「北の池」方向が考えられる。また、土坑群からさらに斜面を降ったところ、整地により埋められた谷のさらに低い部分が考えられる。しかし、いずれも土坑群より低く位置する。土坑群に廃棄されていた窯壁塊、粘土塊、土器片などを、低い位置から高所に持ってくるとは、通常考えにくい。

ここで旧地形をみると、調査地の北東側、現在の駐車場部分には、かつて標高28m程の丘陵が南西－北東方向に延びていた。つまり土坑群のある斜面はさらに北東上方に延びることになる。その頂上部までは標高差にして約５m程、水平距離にして約20mある。窯を営むには十分な空間が確保でき、かつ、廃棄物も無理なく捨てられる。高所から低い谷に向って不要品を捨てるのであるから非常に効率のよい配置といえる。かなりの確率で窯本体は調査地の北東、丘陵上部にあったと考えるのが妥当であり、自然であろう。

3　生産品の流通　ヲノ坪窯跡で生産された埴輪及び須恵器はどこに運ばれたのか。津市内、及び安濃町内でも淡輪系埴輪が出土しており、胎土分析も行われているが、生産地を特定するに至っていない。

今回の出土品も胎土分析等の科学的なアプローチも行い、これまでのデータと比較検討を進め、何れかの解明の糸口を得たいと考えている。

4　戦争関係遺物

焼夷弾の発見に際して、津市の空襲、特に焼夷弾による空襲に詳しい雲井保夫氏に連絡したところ、即日現場に来られ御教示をいただいた。その際の内容、及び『津の戦災－手記・記録・資料』によると、以下のように書かれている。以下要約引用させていただく。

> 発見された焼夷弾はその形状から全てM74型10ポンド焼夷弾である。この焼夷弾を使用した空襲は、太平洋戦争末期の昭和20年７月28日深夜に行われた。これによって津市は市街地のほとんどが焦土と化してしまった。犠牲者は5～600人とされているが実数はさらに多いものと考えられる。M74型焼夷弾は改良された新型で、津市と青森市に対してのみ使用された。中でも津市への使用量は多く、110,922発が投下された。使われた焼夷剤はピロゲルと呼ばれ、木造家屋用に改良されたもので油脂焼夷剤である。点火後上方及び下方に急速に燃える。その灰をかき回したり水をかけたりすると酸素と反応し、さらに激しく燃える。信管は「全方向信管」と呼ばれ、どのような角度からの衝撃にも瞬間的に作動する。終戦後、米軍はその効果の調査を行っている。

何とも始末に負えない代物である。ほぼ完全な形を保っているのは、当時、開墾されたばかりの地面が、まだ柔らかく、クッションの役割を果たして、焼夷弾を着地のショックから保護したのではないだろうか。そして、地中に埋もれたことが幸いして現在まで残されていたものと思われる。

Ｍ６３型通常爆弾は、調査地東方に当時設置されていた軍需工場に投下されたものと考えられる。整地の際に混入したものか、爆発によって飛来したものかは不明であるが、爆発により飛来したものとすれば、その威力のほどが窺われる。

こういった戦争遺物も、大切に保管し、活用していくことが重要であろう。

註

1）磯部克 『三重県地質図集』
（三重県高等学校理科教育研究会地学部会　１９８７）
2）『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ』
（三重県埋蔵文化財センター　１９９４）
3）小玉道明　津市埋蔵文化財調査報告２『坂本山古墳群・坂本山中世墓群』（津市教育委員会　１９７０）
4）浅生悦生・田中秀和 『安濃町史資料編　考古編』
（安濃町史編纂委員会　安濃町　１９９４）
5）浅生悦生 「池の谷古墳」『津市の文化財』
（津市教育員会１９８９）
6）服部貞蔵 『久居古窯址群発掘調査報告』
（久居古窯址群発掘調査団　１９６８）
7）小玉道明 「三重県津市西部長谷山古墳群の研究－大山田古墳Ａ群発掘調査報告」『研究紀要』第５号
（三重県埋蔵文化財センター１９９６）
8）萱室康光 『墓の谷１号墳発掘調査報告』
（津市教育委員会　１９７６）
9）『三重県埋蔵文化財年報15』
（三重県教育委員会　１９８５）
10）村木一弥
『門脇北古墳発掘調査報告』
（三重県埋蔵文化財センター　１９９３）
11）中村光司
『西岡古墳発掘調査報告』
（三重県埋蔵文化財センター　１９９５）
12）吉村利男 『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告Ⅱ－日余１号墳－』
（三重県文化財連盟　１９７４）
13）鈴木敏則 「伊勢の淡輪系円筒埴輪」『Mie history vol.3』（三重歴史談話会　１９９１）
14）浅生悦生・田中秀和 『安濃町史資料編　考古編』
（安濃町史編纂委員会　安濃町　１９９４）
15）橋本滋 「藤谷遺跡－埴輪古窯跡」『津市民文化』第４号
（津市教育委員会　１９７７）

・須恵器の年代観は　田辺昭三『陶邑古窯跡群 I』（平安高校考古クラブ　１９６６）によった。

・空襲、焼夷弾等、戦争遺物関係の記述は、雲井保夫氏の御教示及び、『津の戦災』（津平和のための戦争展実行委員会事務局　１９９５）、雲井保夫『10ポンド焼夷弾Ｍ７４　津市、1945年（昭和20年）７月28日』（雲井保夫１９９６）によった。雲井氏には現場での御教示をはじめ、図27に掲げた資料を御提供いただくなど大変お世話になった。記して謝意を表するものである。

ヲノ坪窯跡調査前風景

北山端地区調査前風景

ヲノ坪窯跡全景（西から）

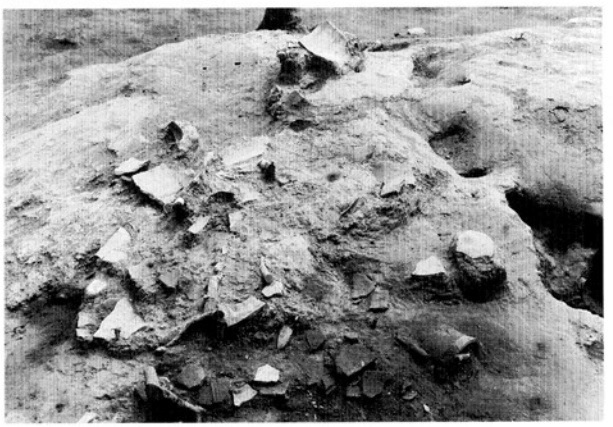
ヲノ坪窯跡全景（南から）

北山端地区西半分（東から）

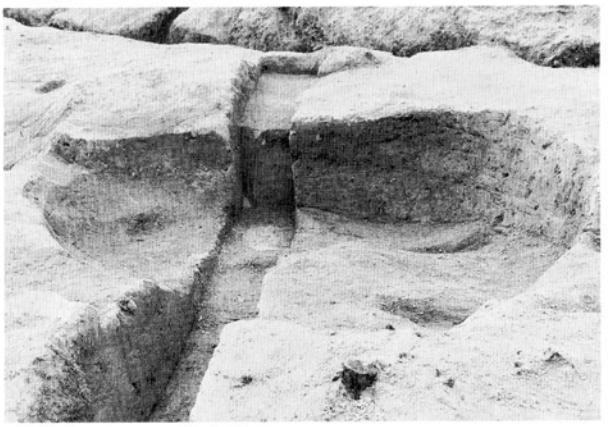
北山端地区全景（北から）

土坑群ＳＫ１　全景

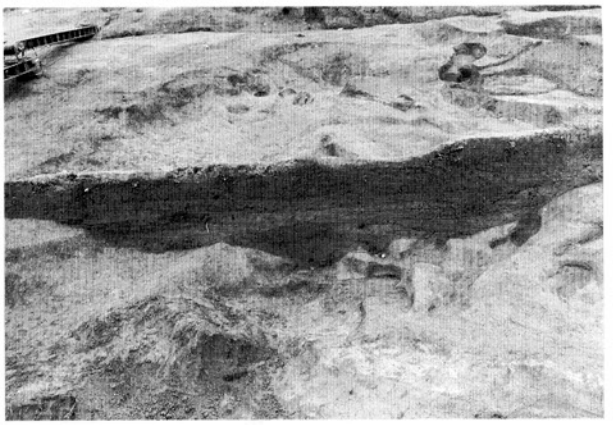
土坑群ＳＫ１　最下部



土墨状遺構　土器群　出土状況

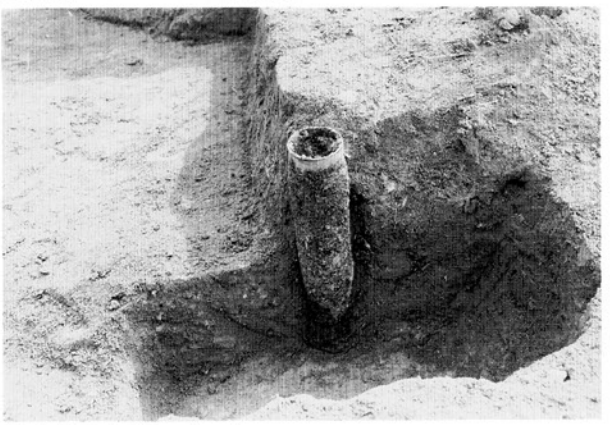


土坑群ＳＫ１　最上部

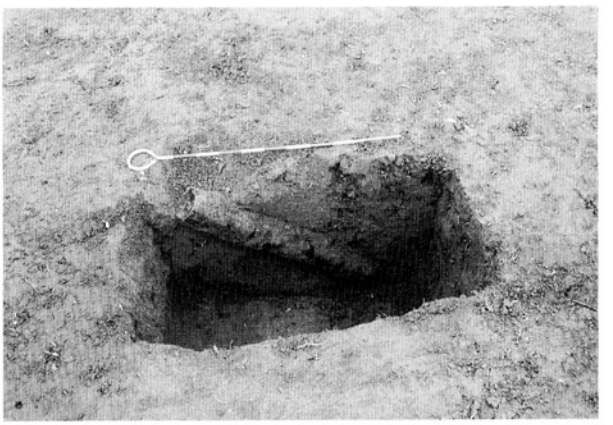


土坑群ＳＫ１　Ｉ－Ｊ断面

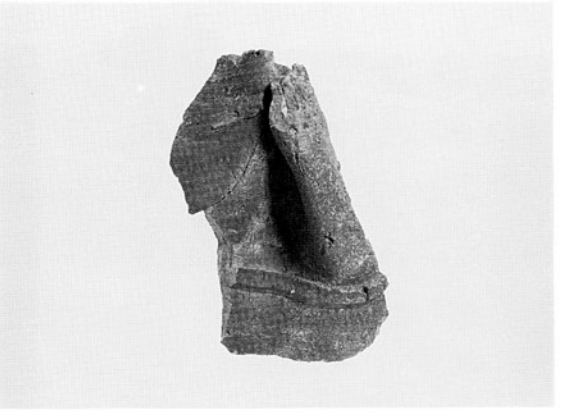
土坑群ＳＫ１　Ｋ－Ｌ断面

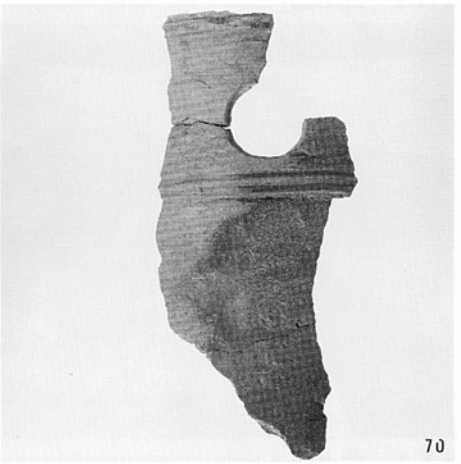


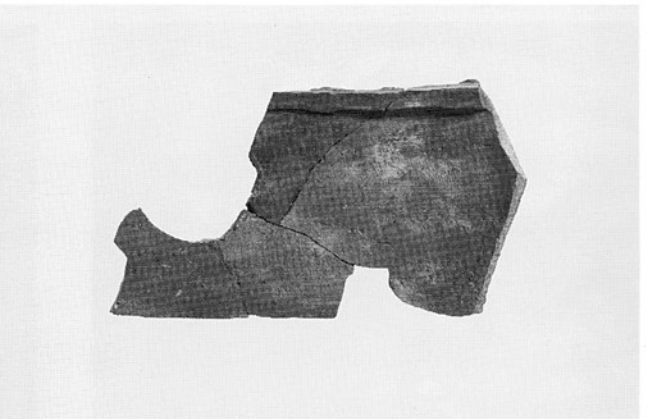
焼夷弾出土状況（100）

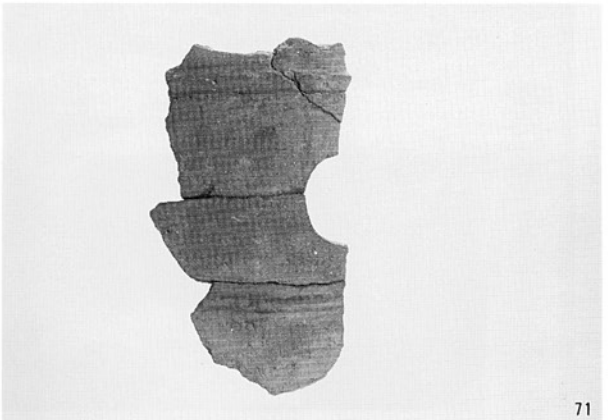


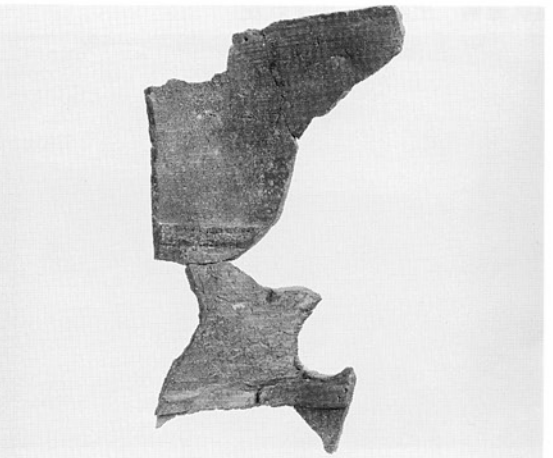
焼夷弾出土状況（101）

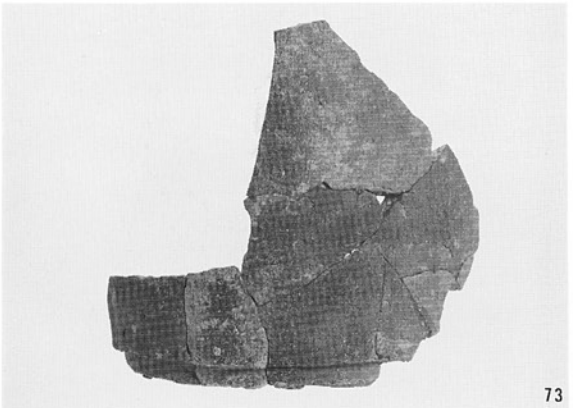


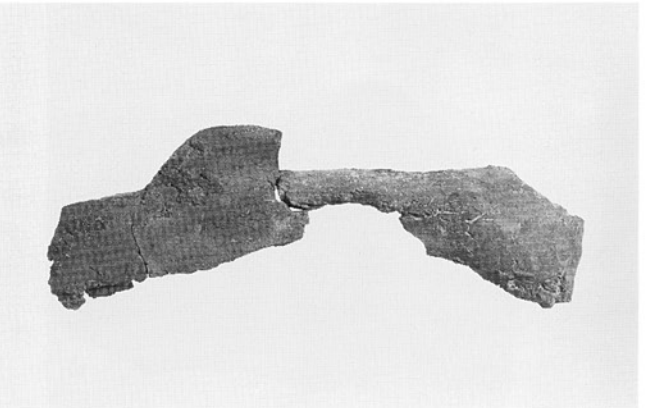




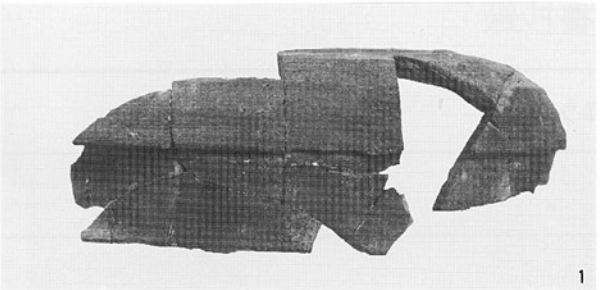


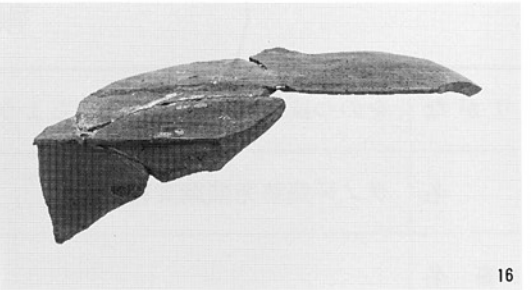


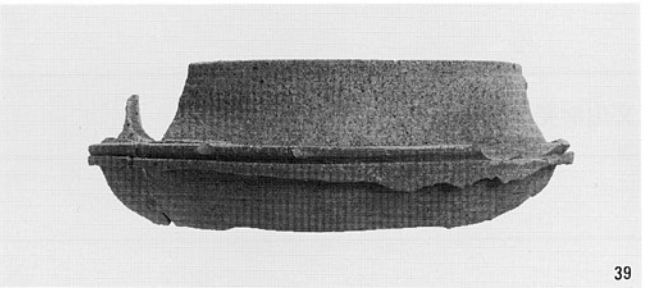


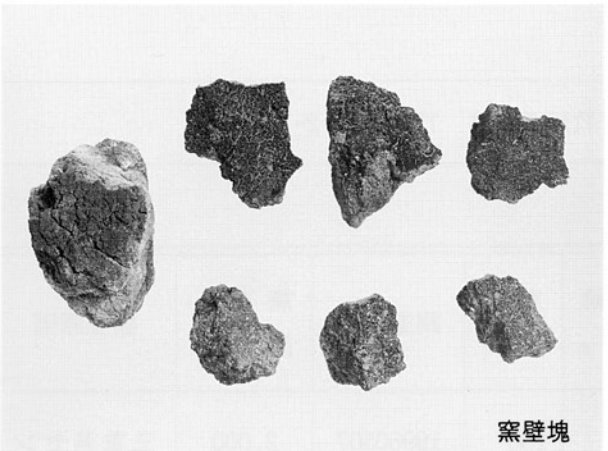


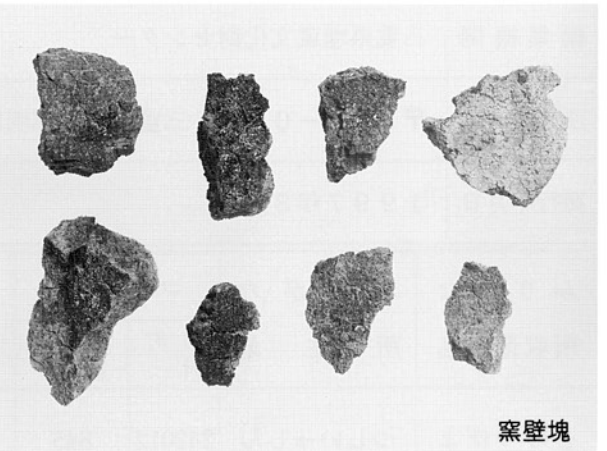
出土遺物（1）（番号を付していないものは実測図を掲載していない）

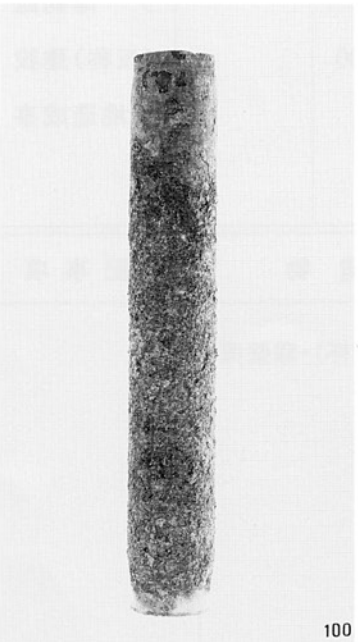


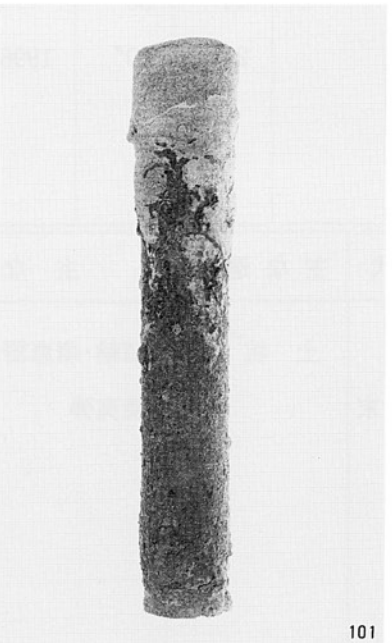


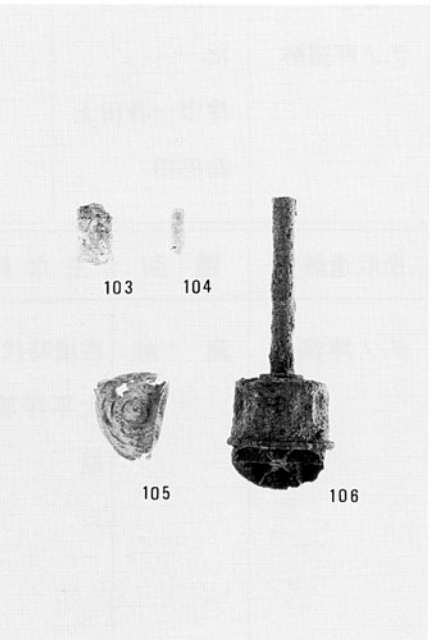












出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	をのつぼようせきはっくつちょうさほうこく
書　　名	ヲノ坪窯跡発掘調査報告
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	１６３
編著者名	田中久生
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒５１５－０３　三重県多気郡明和町竹川５０３　TEL05965-2-1732
発行年月日	１９９７年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
をのつぼようせき ヲノ坪窯跡	つしいっしんでんこうづべた 津市一身田上津部田	242012	845	34° 44′ 27″	136° 30′ 20″	19960507 ～ 19960730	2,000	三重県センター博物館(仮称)建設用地造成事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ヲノ坪窯跡	窯跡	古墳時代 太平洋戦争末期	土坑群	埴輪・須恵器(蓋杯)・窯壁塊 焼夷弾	

平成9(1997)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年8月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告163

ヲノ坪窯跡発掘調査報告

1997年3月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　オリエンタル印刷株式会社